
第 3 章

機関誌
会報と瓦版の記録

1. 会報発行記録一覧

号数	発行年	発行年月日	号数	発行年	発行年月日
第1号	昭和52年	1977年5月1日	第20号	昭和62年	
第2号	昭和53年		第21号	昭和63年	
第3号	昭和53年		第22号	平成1年	
第4号	昭和54年		第23号	平成2年	1990年3月15日
第5号	昭和54年		第24号	平成3年	1991年3月15日
第6号	昭和55年		第25号	平成3年	1991年10月19日
第7号	昭和55年		第26号	平成4年	1992年11月7日
第8号	昭和56年		第27号	平成6年	1994年3月15日
第9号	昭和56年		第28号	平成7年	1995年3月10日
第10号	昭和57年		第29号	平成7年	1995年12月10日
第11号	昭和57年		第30号	平成8年	
第12号	昭和58年		第31号	平成8年	
第13号	昭和58年		第32号	平成9年	
第14号	昭和59年		第33号	平成9年	
第15号	昭和59年		第34号	平成10年	
第16号	昭和60年		第35号	平成10年	
第17号	昭和60年		第36号	平成11年	
第18号	昭和61年		第37号	平成11年	
第19号	昭和61年		第38号	平成12年	

2. おしゃれと流行

(会報第23号 1990)

小野 顕 (社会福祉研究所・当会副会長 文・1948)

私が学生のころ、戸川行男先生は私を「おしゃれ」と呼んでおられた。「オイおしゃれ、いっしょに帰ろうよ」という具合で、私は嬉しかった。戦時中で、学生は制服制帽だから、おしゃれの仕様がな。にもかかわず、おしゃれと認められたことは光栄というほかなかった。

そういう時代の早稲田にも、先生の中にはおしゃれな方がおられた。まず思い浮かぶのは史学科の小杉一雄先生で、寸分の間がなかった。ちなみに、小杉先生のお父上は巨

匠小杉放庵画伯、令息はいま心理学を教えている小杉正太郎さん、美意識では血統書つきの名門である。正太郎さんのおしゃれはデフォルメ型といたい。

早稲田心理学会の御先祖様では赤松保羅先生を書き落とせない。先生のは駄じゃれが全く混じらない高品位のおしゃれだった。戸川行男先生も、画家が奥様になられたくらいだから、おしゃれでないはずがない。ああいうおしゃれっぽくないおしゃれがおしゃれ道の極意だろう。ダンスで高名な伊藤安二先生は以って知るべし。元来、おしゃれ道には戦争も平和もない。雨が降ろうが槍が降ろうがわが道を行くのでなければ、おしゃれ道とはいえない。流行を追うのがおしゃれだと思っている人がいるならば、それは私がいうおしゃれと違う。われ勝ちにみんなが真似をするのが流行で、真似をしないのがおしゃれである。金さえあれば誰にでもできるぜいたくもおしゃれの下道である。イメルダ夫人はマラカニアン宮殿を去ったあとに3,000足の靴を残したそうだが、そういう彼女がおしゃれだとはとてもいえない。

では、三千世界でおしゃれ道の達人といえるのは誰だろうか。私は、あのウィンザー公を挙げたい。英連邦のクイーン・エリザベス二世の伯父にあたり、キング・エドワード8世として王位についたが、わずか11カ月で退位した。理由は、離婚を2回もした米国人マダム・シンプソンとの恋愛結婚だった。そんな浮名を流しただけで、格別の功績もなく、78歳で死ぬまでパーティーや兎狩りで遊び暮したのが、しゃれ者ウィンザー公の生涯であった。

けれども、ウィンザー公は流行をつくった。社交界が公のおしゃれを真似たからである。スーツのズボンのすそを折り返すとか、靴にスパッツを巻くとかいう流行の源は、ウィンザー公から発した。いわば野良着でパーティーに出たようなものだから、金は要らない発想のおしゃれで、そこが達人なのである。ちなみに、スパッツとはくるぶしを被う泥除けで、今はもう見られない。

おしゃれというのは服装のことだけではない。音声、言葉の選択とやりとり、文章、書体、大小の持ち物など、さまざまところでおしゃれができる。粋、風流、ウィット、ユーモア、ボン・サンスなどはおしゃれと同類だが、そう感じるのは気が利いているとき、気に入ったときで、気に入らなければ気障いきざりに感じる。私はウィンザー公をしゃれ者というけれども、人は気障な奴とか自分勝手とか目立ちたがり屋とかいうかも知れない。おしゃれには、そんなうらおもてがある。

ある人の新しさをみんなが真似すると流行になる。しかし、間もなく他の流行に取って代わられて、その流行は廃れてしまう。だから流行は果敢なく、空しい。廃れていくことが分かっているといまいと、多くの人びとは果てしなく流行を追いつづける。それは服装だけのことではない。政治、経済、社会、教育、宗教、芸能、スポーツ……何事にもそれぞれの流行がある。つぎはなにか、と流行を追うマラソン競走が人生ともいえる。50年前の流行語であった「バスに乗り遅れるな」は廃れたが、そういう生きざまは少しも変わっていない。永遠の真理を究明する学問の世界でさえ、である。いま、こ

んなことを書きながら、戸川先生が私を「おしゃれ」と呼ばれたのはなぜか、思い返してみた。多分、オメカシ野郎ぐらいの意味でからかっておられただけで、光栄と感じたのは自惚れだったのであろう。その証拠には、以来40年間に、流行のバスには乗り遅れ、おしゃれ道の一里塚にも及べなかったのが私なのである。

3. 「人間学」研究試論

(会報第24号 1991)

三島二郎 (早稲田大学名誉教授 文・1942)

17世紀初頭において伝統的学問たる哲学に対立して、形而下学を標榜して独立した科学は、当然ながら自らの規範と対象に対する仮定を設けることにより、その独自性を明示する必要がありました。しかしそれによって確かに普遍原理の獲得は保証されたものの、対象の選択に著しい限定を受けることを余儀なくされたことから、従来の形而上学のそれとは全く無関係な学問だという誤った印象を今日にまで定着させていると思います。

かかる事実を心理学についてみてゆくと、科学研究であるためには、いわゆる公共的客観性を持つ単一な心理事象のみに対象を限定せざるを得ないこととなります。したがって日常のより具体的な生活行動や研究者自身にとっての切実な体験といったものの殆どが、研究の対象とはなり難いことです。実はそのことが心理学が容易に科学として踏み出し得なかった最大の理由でもあったわけです。

しかしそれとは別に一旦開始された科学としての心理学研究は、先進諸科学の認識方法を一途に導入することにより、短期間に目覚ましい展開を遂げてゆきました。それはさきの危惧からの不安を解消せんとする反動もあったと思いますが、とにかく心理学は後進科学の利点を最大限に利用して発展したことは疑えない事実であります。

その実際をみてゆくと、最初の科学としての物質諸科学の、次いで生物諸科学の対象認識の方法と観察の手続きを、そっくりモデルとして導入することにより、周囲からは紛れもない自然科学であるという承諾をとりつけることに成功しました。このことを幸いとするか、不幸とみるか、あるいは仕方のないことかを確かめることによって、その心理学者の立脚点と志向をはかる重要な踏絵としても使えることは、今日においてもな



第6回大会 (心理学教室50周年) (1981)

お変りはないと思います。

さてこれら先進諸科学のとっている認識の基本は、対象を限定してみてゆく独自の捉え方に始まり、それは先ず主題とする対象を形態、構造（組成）、運動（機能）に分けて見てゆくことにあります。たとえば物質科学においては特に空間、時間、質量によってみられる形態的原理の追求に適合した認識方法に中心をおいて発展してきたと思われるし、一方生物科学においては形態に関しては物質科学のそれを踏襲しつつも、特に対象の構造、組織、組成を説明するのに都合のいい独自の認識方法を加えてゆきました。さらにこれらの先進諸科学においては構造の特性は形態の原理の規定を受けるものであり、また運動、機能の特性は構造、さらには形態の特性に還元可能なものであることを仮定しております。

したがってこの先進科学のとり認方法に全面的に依拠して発足することになった自然科学としての心理学は、敢えて生命体の意識なり、行動とよびかえた機能を対象とするとしても、それは終始構造、さらには形態の原理に還元可能な特性のみが科学知識としての承認が得られることに限られます。そのために心理学研究においては、無条件に対象の徹底した超単一化が至上なものとなり、事象の現実性を規定している一切の個性は徹底的に統制または排除されることになってゆきました。そうしない限り自然科学の目指す普遍原理の獲得には至らないからです。心理学研究のかかる行き方を支持する研究者が現在においてもいることは事実ですが、これは方法論には無批判であって、対象の恣意的な操作のみに走っていることにより一つの観念論に陥っているという他ありません。これでは遂に心理学研究に期待されたものに答えることは永遠に不可能となることでしょう。したがって少なくとも誤解を与えないためにも、かかる研究は心理物理学、あるいは心理生物学と称すべきだと思います。

省みれば今から丁度50年前に故赤松保羅・戸川行男両先生に提出した精神テンポに関する、ささやかな卒業論文は、その副題に明記したように実験心理学研究でありました。すなわち精神テンポについての物理学的な形態論の観点に立っての研究に終始するものであり、その中心課題は、その後昭和20年代の後半まで続いた精神テンポの恒常性の検証を目指す心理物理学研究でありました。

その間においてこれらの仮説の検証、すなわち精神テンポの動揺性なり、変易性を阻止している条件の解析が問題となってきました。そのためには精神テンポを表出する生命体の構造、組織についての検討が不可欠となり、物理学的観点に加えて生物学的立場が注目されるようになり、終にはこれへの中心移動が行われるようになりました。これが精神テンポ研究の第Ⅱ期に当り、可成り長期間この立場に固執しました。それは第Ⅰ期の研究と同様この第Ⅱ期の検証も、すべて自然科学のとり認実験観察法の適用可能な範囲内に限られていたことからそれだけで科学の承認が受け易いことに満足して、惰性的に細い条件分析を繰り返していたからです。

しかし、かかる恒常性にしろ、変易性にしても、これらは固体における出生以来の生

活場面での発達の所産であるとするれば、生命体と一体化しているかかる発達場の解析を欠くことは許されません。それは広義には行動の生態学的研究であり、また生物社会的ないし心理社会的研究とでもよぶ視点であります。本研究においては端的に地域差研究とよんできましたが、ここで最も重要なことは縦断的な認識方法の確立が必要となってきたことでもあります。

これらが第Ⅲ期に入る研究であり、そこでは全国91地区での25ケ年にわたる膨大な資料の収集と多岐にわたる解析の必要に迫られ、しかもその過程を通じて単なる生態学的認識では到底蔽い切れないことを思い知らされました。すなわち生態学的地域といった単純な空間的拡がりを超えて、時代、歴史、伝統、文化、価値といった条件が人間形成という一点に輻輳してゆく人間発達場の検討が不可欠となったからです。かくて精神テンポとよぶ個人的な行動形態の生成を追求する過程において、あらゆる個性生成場についての新たな認識が得られたように確信しております。

次の第Ⅳ期は、かかる認識の妥当性をいわゆる障害児研究、高年研究に求め、その成果から人格生成の機制に関する仮説を得、これをカウンセリングの実際に活用して検証をしていくことになりました。

確かに精神テンポ研究は、全く実験心理学の課題として出発したものではありませんでしたが、継続的な研究の過程において新たな関心の出現に応じて別個の認識の方法も加えてゆくことが不可欠となってゆきました。換言すれば出発は明らかに自然科学的認識に全面的に依拠して、その枠内での主題の形態から構造へ、構造から機能研究へという観点の推移はあったとしても、つねに還元主義に立つ研究であったことは疑い得ません。しかしさらなる研究の推移においてかかる現象の主体的条件の究明の関心が生ずるところ終にはこれらを規定する形而上学の原理の存在の予感と、またそれを認識するための全く別の認識方法の必要性を考えざるを得なくなりました。

現代を科学時代とよび、これを謳歌する風潮があると思いますが、これは科学と技術を取り違えた表現に他なりません。もともと人間のもつ眞理探究の衝動によって支えられて起こり、発展してきた純粋な学問の一つが哲学であり、また科学であったわけで、そのことにおいては両者に根本的対立といったものはない筈です。したがって哲学の貧困という表現を眞に受けて、科学がその成果の哲学的検証をさけてきたところに重大な停滞の原因がなければ幸いです。しかし現実にはあらゆる科学の原基ともなってきた物質科学に見られる停滞が既に久しいことは紛れもない事実であると思います。

科学はその出発から、つねに研究者個人の存在を超えての対象の公共的客観的世界の存在を仮定し、かかる世界での現象の因果性の追究、すなわち知識の発見に終始してきました。一方哲学はかかる因果性成立の可否の検討を含めて、あらゆる存在の根源に対する研究者の自らの体験と省察にもとづく知恵の発見に努めてきたと思います。しかし双方とも対象世界に対する説明と解釈、存在性についての知識と知恵の探究に方向づけられていることにおいては変わるところはないとも言えましょう。換言すればこれらは

自然、他者、周囲についての眞理発見を目指していることにおいては大差はないので、したがって相互批判も成り立ってきたわけです。

ここにどうしても、もう一つの学問がなければならぬ根拠があると思います。それはかかる科学と哲学の両研究を超えて、これを成り立たしめている研究者、人間自身の問題を研究する分野、換言すればこの2つの学問を生み、また発展させてきたところの眞理探究の衝動の主体者の研究と、その立場からの科学と哲学の原理についての検証に任ずる学問の存在が不可欠となります。すなわちここでは何よりもまずすべての知識と知恵を創造してきた人間自身、自己の飽くなき追究を主題とすることにおいて、自己学、あるいは人間学と称すべき学問の存在であり、これによって初めて科学と哲学はその関係と役割を正しく自覚し得ることになると思います。

かかる第三の学問、正確には究極の学問の存在については、既にPascal, B.やKant, Iは十分に気付いていたと思いますが、これを人間学とよんで明確な構想を提起したのは、今世紀初頭では、Max Schelerが有名であります。しかしこれは現象学を通じての新たな形而上学としての主張であったと思われれます。かかる動向の先駆的なものは既に前世紀後半に始まっており、たとえば新Kant学派でDilthey, W.による精神科学、さらにRickert, H.による文化科学の提起がそれで、これらはいずれも自然科学との対比においての人間科学の主張の域を出ていません。

ここで構想している人間学とは、まず第一に科学研究を拘束してきた規範の修正と、より巨視的な認識方法の開発を目指して、そのためにも科学の知識に対する哲学からの検証を容易ならしめるとともに、哲学の智慧を可能な限り実証してゆくこと、これらを方向づけることを使命とするものであります。その意味において科学はつねに人間学研究の出発に位置づけられるものであり、しかも哲学とともに人間学を目指すものである限り、両者に対立はあり得ません。したがって従来からの科学対哲学、あるいは科学主義対ヒューマニズムといった不毛な論争は本来的にあり得ないことであります。

第二にかかる人間学における眞理発見の方法論についてであります。まず科学の知識と哲学の知恵に対して、それは実存論でいう主体的理解とか、実存論的解釈という一方向的なものであってはなりません。人間学は対象世界のみならず、究極的には眞理探究の衝動の主体者自身の研究をも合わせるということにおいて、そこでは全く主客合一の認識の立場、すなわち発達的存在としての研究者自身の誠実にして長期にわたる研究歴の中に培われてきた学問的良心にかけての眞理の決定ということになるでしょう。したがって研究者の発達に応じて事の眞偽の決定が、時に逆転することがあったとしても不思議でないし、また研究者がその生涯を賭けて眞理の決定に努めたとしても、終局的にはこれを将来の決定に委ねざるを得ない事態はいくらでも起こることでしょう。

本来的に如何なる学問においても、その研究はある人間、個人ではなくて、特定の自己に発した切実な眞理追究の意欲にもとづくものであります。それが特に人間学研究という場合は、科学や哲学における対象世界に限定された眞理発見でなく、研究者自身

と対象世界を一体化した全体の中において、その認識の主体である自己の追究を終局の主題とするものであります。したがってそこで得られた真理の検証は、究極的には研究者自身と、それを共感的に受容し、追体験に努めるものに限られることは至極当然なことでしょう。かくしてこの人間学の展開によって、今日なお伝統的な心理学研究の埒外に放置されてきた人間性にかかわる諸課題、さらには学問の対象外とされている宗教、芸術、文化といった価値にかかわるすべての課題が、実は人間学の切実な対象であることの認識が生れることにより、必ずやここに新たな地平をひらくものと確信しております。

4. 戸川行男先生・新美良純先生 追悼特別号

(会報第26号 1992)

昨年12月25日に新美良純先生が、本年1月3日に戸川行男先生が逝去されました。早稲田大学心理学会はもちろんのこと、日本の心理学会を先導してこられた両先生の計報に接して、失ったものの大きさを思わずにられません。本号では、両先生につながりの深い6人の先生方に、両先生の思い出をお寄せ頂きました。

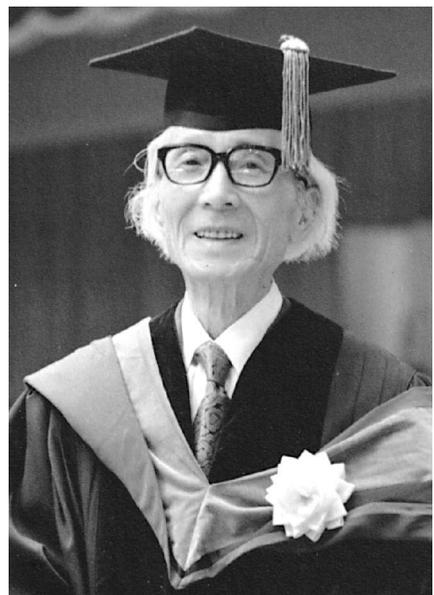
ここにあらためて両先生の威光を偲ぶと同時にご冥福をお祈りいたします。

1. 戸川行男先生の思い出

本明 寛 (早稲田大学名誉教授 文・1941)

明治36年2月1日東京の生まれで、先生は純粋な江戸っ子でした。昭和4年早大西洋哲学科を卒業され、赤松保羅先生の招きに応じられて、心理学教室創設に参加されました。当時(昭和6年~14年)、熊本第五高等学校から内田勇三郎先生が着任され、教室創設に当たられていました。赤松、内田、戸川の三先生により、心理学界後発の早大心理学教室の特徴を臨床心理学におくことに決定されました。第二次大戦前に臨床心理学を教室の目標としてかかげた大学はなかったように思います。

今の若い教室出身者には想像もできないことでしょうが、当時学生は1学年3~4名しかおりませんでした。学生は内田先生の私的助手になったり、被験者になったり、将棋の相手をしたりで朝から夜までとても忙しい毎日でした。戸川先生は坊主刈頭



戸川行男先生
早大創立100周年記念式典にて (1982)

で、牛若丸のような敏捷さで研究をされていました。「早稲田大学心理学教室五十年史」をお読みになればこの辺のことがよく分ります。戸川先生の晩年を考えると想像も出来ない実践家でした。メスカリンの実験も自分が被験者になって、貴重な記録を残しておられます。当時早大の「ウソ発見器」とさわがれた装置（GSR）も先生の研究のひとつでNHKから放送されました。もっともこの時はウソは発見出来なくて、先生もお困りのようでした。内田先生との共同研究者としてクレペリン検査も大々的にデータを集められて、いわゆる15分作業、5分休憩、10分作業の原型を苦心して作られました。現在は内田クレペリン検査として広く知られています。クレッチメルの「体格と性格」の理論から、戸川先生は写真を重ねて焼きつけ、性格と体型の関係を熱心に追研究しておられました。まだあります。先生は千葉県八幡にあった精神薄弱児施設（八幡学園）に毎日のように通われ、精薄児のパーソナリティ研究をしておられ、その過程で山下清君を発見しました。私もその頃学生でしたので、先生に引率されて山下清君の貼り絵による天才的画法を見学しびっくりしました。戸川先生は自分のお金を使って、いろいろの大作を彼にかかせていましたし、「特異児童」や山下君の画集の出版に力を入れていました。たしか、「特異児童」はその後ベストセラーになり、銀座で山下君の展覧会を先生が開かれた時には、絵を見に来た人の列が服部時計店から日劇近く迄並び、交通整理は騎馬巡査が出たとか？新聞に載っていたと記憶しています。

当時の戸川先生は学生から兄貴分ぐらいの扱いを受けていましたし、よく長い学生用の腰掛けをまたいで、学生と将棋を打っておられました。当時の文学部の授業はほとんど原書を使っていました。哲学のある先生はドイツ語の原書を使っていましたが、当時15円（月謝は10円）もして学生を泣かせたものです。戸川先生はドイツ語がお得意で、よく外国の雑誌を紹介されました。

これを要するに、戸川先生の業績はお若い時からとても凡人の到達できるものではなかったということを申したいのです。先生について、私はいくつかの追悼文を書きましたが、今回は教室の若い学生さんたちに戸川先生についての知られない一面を紹介しました。先生の晩年の臨床理論に関する業績をたたえると共に、先生のご冥福を心からお祈りします。

2. 私から見た戸川行男先生 小野 顕（社会福祉研究所・当会副会長 文・1948）

白髪オールバックの面影がまず目に浮かんでくる。お見舞いに上がったある日、「あんた、真似したの」と私の白髪を指差して、笑われた。あのヘア・スタイルは終戦以来のもので、それ以前は坊主刈りだった。心理学教室五十年史の口絵写真に、昭和13年撮影の『呼吸とプレチスモグラム測定実験』というのがあって、被験者として坊主刈りの戸川先生が写っている。髪の色はかなり黒く、時に35歳のお姿である。

私の経験を言えば、在学中だった昭和19年ごろに、軍事教練の若い教官に非国民だと

どやされて、坊主刈りを厳命されたことがあった。あのころは、そんなふうにならなくても坊主刈りにさせられていた人が多くて、その人びとは敗戦を知ると、待ってましたとばかり長髪に戻った。それとは逆に、軍事主義のあかし(?)として進んで坊主刈りを実行していたが、敗戦とともに時代の波に即応して髪を伸ばした人びともまた少なくなかった。しかし、戸川先生の場合はそのいずれでもなかったと思う。

先生は若白髪だったのではなかろうか。初めは、それをごまかすために坊主刈りになさったのではなかろうか。そして、もはやごまかす必要がない年齢に達したときに、あの長髪にモデル・チェンジされたのではなかろうか。とは言っても、ご本人に確かめたわけではなく、私の憶測に過ぎないのだが。

私が弟子入りしてこの方の50年間に、先生の風貌にその点のほかこれと言った変化はなかったように思う。時が移っても影響を受けないほど個性が強かったからであろう。風貌だけでない。独特の楷書体で、四角な字画を丸く崩したりなど決してしない戸川流の書法。思いつくままに飄々と語っているようでありながら、論旨は完璧に出来上がっている戸川流の話術。そのほか、日常の起居動作から着衣や持ち物の選択にいたるまで、なにごとにも50年間変わらない戸川流があった。

私が在学した戦中・戦後には、心理学教室に出入りする学生達は魔法の城に迷い込んだように戸川ファンになっていた。心理学専攻(いまは専修と言うらしいが、当時は専攻)の学生ばかりではない。他専攻、他学部、他大学の戸川ファンもいて、わが物顔に出入りしていた。戸川ファンになると、人それぞれになんらかの戸川流が伝染した。私もその1人で、今だに魔法が解けずにいる。

そのように言うと、先生を直接ご存じない方は、カリスマ的な人物を想像されるかも知れないが、それはまるで正反対である。戦中は東条英機、戦後はダグラス・マッカーサーといういささか神がかった人物をマスコミがもてはやした時代であったが、そんな人物こそ先生は大嫌いだった。戸川ファンにとっては、先生のそういうところが魅力なのであった。

なにごとにも戸川流を変えない坊主頭の人物という描写が頑固一徹の印象を与えるとしたら、それはあながち的外れでないかも知れない。そういう一面もあったようだからである。しかし、怖い先生では決してない。芯から優しい先生だった。

大学周辺の食堂で外食できるのは1人1杯の雑炊だけだった戦争末期に、1時間も2時間もかかる行列をしながら、一対一で心理学を講義して下さった先生。

新宿の露店では1杯10円のイモ汁粉が奪い合いの売れ行きだった昭和20年ごろ、闇買いたしたサツマイモの汁粉を二升釜一杯作り食べ放題というご招待を申し上げたら、港区白金にあった拙宅までいそいそとお越し下さり、私と2人で遂に残さず平らげてしまった先生。

焼酎瓶を下げて先生のお宅に押し掛け、おだをあげた末に酔いつぶれた私を介抱した上、泊めて下さったのは25年だったか。

29年、誰の結婚式でも仲人は絶対にやらないと言われたけれども、握り寿司食べ放題に釣られてとうとう私の仲人を引き受けてしまった先生。

お棺の中で瞑目された先生のお顔はあのころと同じ優しさで、なにか私の思いも及ばぬことを考えておられるご様子であった。

3. 戸川先生のいわゆる金釘流について

岩下豊彦（早稲田大学文学部教授 一文・1956）

1981年10月25日発行の『文学部報』第11号に、戸川先生の「学校で教わったこと」という一文が載っている。昔、『文芸春秋』誌の「文芸春秋」欄に何度となくきらめいた戸川エッセイの健在を示しており、秀作のひとつといえよう。『文学部報』としてはいつになく多くの学生に手渡ったと聞く。

その中に、こんなくだりがある。「私は會津八一先生に早稲田中学1、2年の頃から教わり、市島春城先生のお宅であったとかの、例の草ぼうぼうの広いお宅に何回かなんとかお邪魔に上がったのであるが、早中で先生に教わって今おぼえていることは、わしは8人兄弟の総領に生まれたので、おやじが八一という名をつけたのだということ、夜店で盆栽をタダで買う法、かもを手づかみでとる法である。もうひとつは、お前は字がへただから、活字と同じ字を書け、へたな崩し字ぐらいいやなものはない、というお話で、これはけんけんふくようして78歳の今日に及んでいる。」

発行後しばらくして例の草ぼうぼうの戸川先生宅にお邪魔した折、「8人兄弟の総領に生まれたので、おやじが…」のくだりを話題としたが、いつものごとく幾重にも煙に巻いてお話になるそのあちこちに會津先生への共感がにじみ出ており、びっくりした。戸川先生は滅多に他人への共感を表わされなかったからである。私は、そのとき、戸川先生はきっと夜店で盆栽をタダで買ったり、かもを手づかみでとったりなさったにちがいないと確信するに至った。字のことも、私が学生だった頃から何度となくうかがっていたお話、つまり、「字を習いに會津先生のところへ伺ったが、人にわかるような字を書くしかないと言われ、以来そういう字を書いてきた」を思い出し、「會津先生のお話をけんけんふくようなさったのはごく自然」と妙にひどく得心したものである。

それから10年を経た去年の夏、思えば、慶応病院へ入院なさる前のお元気の戸川先生にお目にかかることができた最後の日、何かのきっかけで新宿中村屋にある會津先生の書の話になったとき、先生は突然、私が座らせて頂いている後ろの紙類の山を指し、「そこに會津先生のお手本があるんですよ、そんなの見たってしょうがないですけど」と言われた。「是非見なさい」という先生の独自表現であること周知のとおり。早速、山を崩していくと、下の方から、一面手習いで埋まっている古びた和紙数枚と一緒に、會津先生の書集が出てきた。まずは事の次第として、手習いが誰のものかを尋ね（もちろん戸川先生のもの）、その後、先生が「お手本」と呼んだ綴の表紙を開けた。あの

どかな墨痕であり、何と書いてあるか読めたり読めなかつたりではあるが、一応格好をつけて1ページずつ繰り返していくこととする。人が皆上手と評する筆蹟の、全うに読めもしない書を辿るのは、格好づけとはいえ、いささかつらい。次第に、繰る手が速くなっていく。

ところが、もうそろそろ書集も終りに近くなつた頃、私は、自分の目を疑ってしまった。何と、そこには、戸川先生の字体とそっくりなのが何ページにもわたって続いているのではないか。唯一つの違い-震えを除けば、戸川先生のお書きになったものがまぎれこんでいると思わせるほど、まさに似ているのである。しかも、私のそばには、それを手習われた戸川先生の書字一杯の和紙があり、なぜ似ているかの答つきときている。戸川先生のお話を「會津先生はご自分の書体のうち一番わかりやすいものを選んでそれを戸川先生に手本とするようにとおっしゃり、戸川先生は、それを一生懸命に手習われた」という文脈で理解しなければならないなど、40年間一度として思っても見なかった。その不明に慄然としたこと言うまでもない。ご自身がおっしゃる金釘流の書字が実のところ會津先生をお手本とした手習いの成果であると明らかにされたときの戸川先生の眼は、われわれ何度となく経験したあのいたずらっぽさで溢れていた。

戸川先生がお手本とした會津先生いわく「活字と同じ字」と戸川先生の字とは、今冷静に比べても、震えを除く限りやはり似ている。しかし、どの程度似ているか、つまりどの程度手習いの成果があったかは、私ごとき素人の判断すべきことではない。私がここで述べたかったのは、長年にわたって戸川先生のお話を戸川先生が會津先生に書を習おうとされたところ、會津先生から見込みがない、せめてわかりやすく活字のような字を書くようにと言われたので、独自の金釘流で書くこととした」という文脈で受けとっていた不明である。戸川先生ご自身から手習いをされた和紙とお手本とを見せて頂き初めてお話のほんとうの文脈を知ったというのであるから、その不明は阿呆に相当しよう。會津先生に何とおりの書体があり、そのうちのひとつに戸川先生のいわゆる金釘流が似ているという事実は、會津先生の書について知っていれば当然気づく筈である。これをつきつめれば、私に、戸川先生のお話のほんとうの意味を受けとるだけの教養がなかった、という結論になっていく。戸川先生は大変なテレ屋であられ、ご自分のことをおっしゃるときの話が一筋縄で受けとめがたかった点周知のところであるが、それだけに留まらず、先生のお話には、會津先生が人を喰ったような話を次々とおっしゃり、それを戸川先生がしれっとしてお書きになるといったごとき、遊び心がつきまとうように思う。お話を理解し得るに足る備えのない私は、戸川先生のおっしゃりたい文脈を何度とり違えてきたことか。戸川先生のいわゆる金釘流が何であったかは、ご自身で明かしてくださったが、私には、戸川先生が教えてくださった真意を把握し得ていないことが山ほどあるように思えてならない。戸川心理学を哲学的心理学の一つであると紹介している人がいると聞くが、そのように安直に整理できる人、うらやましい限りである。

4. 新美良純先生のこと

橋本仁司（早稲田大学教育学部教授 一文・1952）

昨年の暮に、新美良純先生が亡くなられ、明けて今年の初めには戸川行男先生が逝かれて、両先生には因縁浅くなかった私は、まるで一つの時代が終わったような感慨を覚えております。何しろ、私は学部学生の時も、大学院生の時も、指導教授は、一貫して戸川先生でしたし、その実際の研究指導は新美先生のお世話を蒙ったという事情があります。語るべきことも多々ありますが、紙幅の都合もあり、思い出すまま、2、3を挙げて、先生のご遺徳を忍ばせて戴きます。

今の都電（昔の王子電車）の終点を越えると、神田川に掛かった小さい橋、豊橋があります。先生は、豊橋を渡って、右に折れた袋小路、その昔には熊本細川藩の下屋敷があった敷地に建てられたコンクリート造りにお住いでした。周囲には荒れた広い庭があったように覚えております。そこは今、新江戸川公園として整理されているようであります。まるで昔の面影はなくなっていました。先生は東京育ちながら、熊本弁を使うと云って、ご自分の発音を気にして居られましたが、これはご両親の影響でありましょう。お父上は白髭のお年を召された方で、先祖以来のお役目で、細川家の屋敷の管理などをなさっていたように聞きました。お母上はことば遣いの丁寧な方であったと覚えております。共著論文を書く時などに、お邪魔して、ご迷惑をかけたことを思い出します。

昭和30年前後という今から40年ほど前のことですが、今の法学部8号館が文学部で、その狭い地下室に、GSRの実験室があった時代がありました。脳波も筋電図も取れるようにと機械を配置してありましたから、人は機械の間の隙間に立ったり、座ったりしておりました。新美先生を大将に、望月一靖氏（戸川先生の葬儀斎場をつとめてくれたお寺、善性寺の住職）、中山剛氏（長く日立中央研究所の主任研究員をつとめ、今は富山大学工学部教授）と、それに私などが、たむろして、研究らしい、おままごと（？）をやっていた時代であります。

狭い研究室に被験者とオシログラフその他の測定用具一式をおいての実験では、実験をする際は、実験者と実験助手の1人を残して、他の者は室外に出て、適当に時間を潰さなければなりません。その上、何か故障でも起こることに備えて、遠くに遠征する訳にもいきませんでした。そんなところで、私共が論文の幾つかを書けたのは、仲間が、新美先生を含めて、あまり年が違わなかったので、お互いの意志疎通が遠慮なくできたお蔭であったように思われます。

戸川先生は名人芸といってもよいほどに、座談の巧みな、それこそ天下一品の話し方



新美良純先生

早稲田大学心理学教室50年誌
(1981)

をなさる方で、他方、新美先生は、遠慮がちに、ぼそぼそと、ものを云うタイプの先生でした。話し方ではまるで、月とすっぽんほどの隔たりがありましたが、お二人の間に共通していた立派な美德がありました。それは他人の悪口は、一切おっしゃらないという点でした。口が軽く、つい批判めいたことを調子に乗って口にする、しかも当の相手の面前でもやりかねない悪い癖のある私は、繰り返し教えられることがあったように思っています。

その新美先生が、珍しく批評がましいことばを吐かれた時がありました。先生が早稲田から東京都の研究所に移られた前後、たまたま、国際心理学会が東京プリンス・ホテルであった時でした。ホテルの喫茶室の奥まった座席で、退職に至った経緯などを話された折に、珍しくきついことばで、人物月旦をなさっていたことを思い出します。いろいろと込み入った諸般の事情を、詳しく説明して下さって、さて、ご自分の研究の継続維持のためには早稲田には居られないと語調鋭く、云われたことが今でも、耳朶に残っております。その頃、私も社会心理・産業心理の領域に研究主題を移し、加えて身分も当時の生産研究所（現システム研究所）から、教育学部に移って間もないことで、新美先生の苦労はよく分かりました。私が自分の専門を生理心理から、対極の研究領域に乗換えたのは、研究に何ら機械設備を必要としない、従って勝負は、専ら研究者の構想の良否に依存する研究へと、思い切って方向転換を考えたことによるものでした。いわば、同じ困難に対して、新美先生と私とがそれぞれに最善と思われる対処手段を講じたのでありますが、先生と私では、それぞれの立場の故に、180度違った、正反対の方向であった、ということでもあります。

私の現在専門としている研究領域での、私の最近の研究業績は、新美先生には馬耳東風であつたらしいことは、以前から知っております。いかにも新美先生らしいなど、あえて、ご理解を求めることもしませんでした。新美先生は色盲で、強く希望した医学への進学を断念せざるを得ませんでした。そこで、なるべくご自分の夢見たものに近いと選んだ領域、その道を一筋に、それこそ一所懸命に進まれて、わき見一つされず、専門研究者として一生を終えられました。私にはとても真似できない、と改めて深い尊敬を払う者であります。

ご冥福をお祈りして、筆をおきます。合掌。

5. 新美良純先生を偲んで

山崎勝男（早稲田大学人間科学部教授 一文・1965）

新美良純先生はかねてより入院加療中であつた東邦大学医学部附属大森病院で、平成3年12月25日、肺癌のために死去されました。享年68才でした。平成3年5月頃より体調を崩され、入院加療中でした。病名はご存知でして、お見舞いに伺う度に、治療状況を客観的に説明しておられました。

私が早稲田大学第一文学部哲学科心理学専修に入学したのは、昭和36年でしたが、当時の新美先生は医学博士の学位を取得されて間もない頃で、年齢的には30代の半ばといった気鋭の少壮学者でした。当時は学部の1年生でも研究室（実験室）へ入ることが出来ました。何かのご縁で私は新美先生が主宰しておられた生理心理学実験室へ入れて頂きました。学部の先輩方が盛んに我々新入生を勧誘して下さったからです。当時は現在法学部が使用している8号館（南門に面した旧図書館の裏）が文学部の校舎でした。実験室は半地下1階の奥まったとても狭い部屋で、実験機器と手作りの簡易防音室が室内空間の八割方を占有しておりました。私が学部の1年生の時に、この部屋で新美先生にお目にかかったことはあまり無かったように思います。専ら学部の先輩方が私ども新入生の指導に当たっておられました。ですから私はこの時代の新美先生についてはほとんど語る資格がありません。学部2年に進級した時に現在の文学部校舎が竣工し、本部キャンパスから戸山キャンパスへと引越しが行われました。実験室も当時としてはかなり広く、防音室付きの立派なものとなりました。新美先生好みの天井まで引出しがたくさん付いた戸棚が印象的でした。ただこちらに移ってからは、従来の実験室制度のようなものは、一応解散となり、研究プロジェクト制に変更されました。その結果、多くのプロジェクトが誕生しました。私たち2年生のグループは直接新美先生に交渉して、毎週1回ホヴランド（Hovland）のGSRを指標とした条件づけの論文輪読を指導して頂きました。スタート当初は6～7名のグループだったのですが、回数を重ねるにつれて、参加者が少なくなりました。それでも新美先生は必ずこのプロジェクトに定刻に出てこられ、1～2名の出席者に対してもいつものように懇切丁寧に指導して下さいました。私が学部の3年生であった1962年から1963年にかけて、新美先生は早稲田大学の国内研究員として、東京大学医学部附属脳研究施設の故時実利彦先生のもとで、睡眠の神経生理学の研究をされておりました。ですから、この年度はほとんど新美先生にはお目にかかれませんでした。私が学部の4年生になった時は、新美先生が研究室に戻ってこられ、1年間の国内研究で身につけられた研究手法を私どもに手をとって教授されると同時に、睡眠の生理心理学的研究を陣頭指揮で展開されました。被験体はネコを用いましたので、各種電極を頭部や頸部に埋め込まねばならず、手術などしたことのない私どもは新美先生の手技に目を丸くして見入ったものでした。このことが契機となり、私の大学院時代は動物の睡眠研究とヒトの睡眠研究が同時平行的に展開するようになりました。また従来の通電法の皮膚電気反射から電位法の皮膚電気活動へと生理指標の方向転換したのも丁度この頃でした。この時代には研究室も人的に充実し、堀忠雄氏（現広島大学総合科学部）、丹治哲雄氏（現文教大学人間科学部）、宮下彰夫氏（現東京都神経科学総合研究所）らが研究の推進役を担っておりました。

学者としては当然かもしれませんが、新美先生は文献の収集と整理が趣味の域に達しておられました。皮膚電気活動に関する内外の文献はほとんど網羅的に収集しておられ、当時事務用品として出回り出した4段のファイリングキャビネットは見事に整理さ

れておりました。同時に文献力ードの整理も見事なものでした。私たちがこと皮膚電気活動に関する文献検索に苦勞した覚えは全くありませんでした。

新美先生は新たな研究場所を求められて、1973年に早稲田大学から東京都神経科学総合研究所に転出されました。そして創設間もないこの研究所の専門参事として、早稲田大学時代からの睡眠の生理心理学的研究を継続されました。その後、1979年から1988年までは東邦大学薬学部教授として、さらに1988年からは東京家政学院大学人文学部教授として、学生への教育に情熱を燃やしておられました。両大学では教育の傍ら、皮膚温の生理心理学的研究を始めておられました。

新美先生は1987年国際パヴロフ学会において、ガントメダル授与の栄に浴されました。条件反射研究の関連で顕著な業績をあげたことが授与の理由と伺っております。私ども一同この慶事に大喜びをしたことが、つい昨日のように思われます。

私どもは新美先生が早稲田大学をお辞めになられた後も、学会や研究会等で、頻繁に先生の馨咳に接することが出来ました。まだまだ沢山教えて頂くことを期待していた矢先の計報でした。非常に残念でなりません。ここに謹んで先生のご冥福をお祈り致します。

6. 神経研での新美先生

宮下彰夫（東京都神経科学総合研究所 一文・1969）

今年の桜は雨にたたられっぱなしで、ここ神経研の居室から見える桜はもう葉桜である。新美先生が体の不調を訴え始めたのは去年の5月であるから、あれからまだ一年経っていないのかと、今しみじみ思う。

肺癌に侵されていることが判明した6月。8月まで持つかとか、10月まで持つかとか医者に言われながらの闘病生活。肺炎を併発し、呼吸不全に陥り、あっけないくらいに迎えた臨終の11月15日。そして通夜、告別式、納骨。その一部始終に立ち会ってきながら、それがわずか6ヶ月余りの出来事であったことが信じられない気がする。

新美先生が、ここ神経研に在籍したのは、1973年から1979年までの6年間であった。そう長い期間ではなかったが、新美先生にとっては、人生の大きな転機であったろう。早稲田で築き上げてきた研究環境の多くを思いきってご破算にし、創設間もない研究所に赴任するには、並々ならぬ決心が必要だったに違いない。その決心をもたらした要因のひとつとして、東大脳研に対するアイデンティティ、つまり時実門下の一人として行動したかったことがあるのだろう。

日本の脳・神経生理学を飛躍させ、研究者として、指導者として、また啓蒙家として、多大な足跡を残した故時実利彦博士は、神経研の生みの親でもある。そして神経研の中核をなす研究員の多くは、時実門下であった。尊敬する時実先生からの心理学研究室創設の要請は、新美先生にとっては大きな喜びであり、また時実門下のそうそうたる面々と一緒に研究できることへの期待は想像に難くない。私が大学院博士課程の時、新

美先生は神経研に赴任した。当時神経研に伺うと、先生は新しい研究設備や測走機器を、喜々として我々に見せ、得意気にその性能を語っていたのを思い出す。大学ではでき得なかった実験設備を、思い通りに造り上げられる喜びが感じられた。先生は人間の睡眠実験室システムを造り上げられた。これは当時としては他に類を見ないりっぱな睡眠実験室であり、その後改良を重ねながら、今でも日本有数の睡眠実験室として継承されている。

95年に私が神経研に赴任し、先生と共同研究体制をくんだ。そこでの2人の分業のさまは、他人からみると奇妙なものであったかも知れない、まだ若かった私が（今でも若いつもりだが）、実験の実施やデータ整理の陣頭指揮に立つのは当然として、やっかいな事務処理や実験器具の製作は先生がという具合であった。

先生は官吏になっていたら、たぶん有能な官吏になっていただろうと思う。事務的な書類の作成や研究費の申請などは、大変精緻かつ正確であり、すべておまかせしたほうが物事が円滑に進んだものだった。読み易い書類を作るために、今ではワープロにとって替わられ見することもできない、手動の和文タイプライターに、夜遅くまで向かっていた姿が目につかぶ。ただ、時々ニヤッと笑われながら、私は秘書ですから。」といわれるのには閉口したものだ。

実験器具の手作りは、先生の独壇場であった。どこからともなく、用済みになった部品を持ってきて、あれこれ組み合わせて目的の器具を作ってしまうのだ。こういう作業をしているときには、手伝うのは禁物である。趣味と実益をかねた作業といたいだが、それは先生の趣味そのものであり、手伝うことはその楽しみの一部を奪ってしまうことになるからだ。先生が神経研を去ってからもう12年になるが、ひょんな時に先生のかつての製作品を発見することがある。そんなとき、研究を軌道に乗せるべく、夜遅くまで頑張っていた日々をなつかしく思い出す。

5. 職場紹介—マスコミ特集— “アナウンサーという職業について”

(会報第27号 1994)

八木亜希子 (フジテレビジョン アナウンス室 一文・1988)

「心理学科から、どうしてアナウンサーをめざそうと思ったのですか？」と、雑誌のインタビューなどで聞かれることが、よくあります。そう言われてみると、心理学科を卒業している人は、フジテレビのアナウンス室には、他にいないようです。

自分自身、就職を考えるまでは、アナウンサーになるなどは、思ってもみませんでした。

在学中は、恥ずかしながら小さなサークルで芝居をしたりしていたのですが、そんな劇団仲間の中でも、アナウンサーというのは、どちらかという、優等生的なイメージ

があって、世間で言う程、憧れる人もいなかったし、身近な職業ではなかった気がします。

ところが、就職活動をしてゆくうちに、「なりたい」という気持ちが強くなっていった、いつのまにか、今に至るわけなのですが、改めて、この仕事をみつめ直してみると、とても心理学的な洞察力の必要な仕事だなと思うのです。

入社したての研修の頃に、上司から「アナウンサーという仕事は、話すより、まず聞く、そして見る仕事です。」と言われたのですが、実際、取材に行く、インタビューをとる、トーク番組のアシスト、バラエティの進行、スポーツの実況、そしてニュースと、どれをとっても、まず聞く、あるいは相手を観察するというところからはじまっているのです。

大学時代を不勉強なまま過ごしてきてしまったので、心理学について語れるものは、何ももっていないのですが、もともと自分もっていた、人への心理学的な興味が、今の仕事につながっているのだなあ、これも、自然な流れだったのだなあと感じています。

そんな流れから、アナウンサーになって、早や丸6年が過ぎようとしているのですが、それこそ、自分の仕事場の人々を"観察"してみると（これは先日上司とも対談で話していて、みんなで一致したのですが）アナウンサーというのは、非常に中性的だと思えます。女性はより男性的に、男性はより女性的に、段々と歩みよっているような気がするのです。

限られた時間との戦いを余儀なくされ、会社員なのに人目にさらされるという特殊な立場の中で、ある程度の割り切りと、ある程度のこまやかさ、又、ある程度の大胆さと、ある程度の自意識を必要とされるからかもしれません。

私自身、年々たくましくなっていてゆく自分が怖かったりするのですが…。

さて、その具体的な仕事の内容については、皆さんが日頃、目にしている通りなのですが、ニュースの原稿読みから、バラエティの進行、果てはCMまでと、本当に多岐にわたっています。もちろん、私がフジテレビだから、特にということはありますが、他局をみても、アナウンサーという枠組が、年々広がりつつあるのは事実です。私自身、その渦中に身をおいて、近頃考えるのは、「じゃあ、アナウンサーって一体何なのだろう」ということです。

かつて入社試験で「近頃アナウンサーがタレント化しているとよく言われるが、あなたにとって、タレントとアナウンサーはどう違いますか？」という質問がありました。この質問に正しい答えはありませんが、「信頼感を失わず、正しい日本語を心がけるという立場。そして、その場の空気を伝えるという役割が求められる」ということが違うのではな



早大心理学会年次大会にて（2001）

いかなと思っています。

今の私には、自分自身、耳の痛い話ですが、どんな場においても、このことを心がけることが、番組において、あるいは局においてのアナウンサーの果す役割なのだろうと改めて思うのです。

いずれにせよ、年々アナウンサー志望の学生の方が増えているのは、現役の私にとっては大変嬉しいことで、又、アナウンサーという職業は、若干の時間と、若干のプライバシーを犠牲にする覚悟があるならば、特に女性にとっては、多くの輝いている人々との出会いによって、男性に遜色なく、自分を磨いてゆける魅力的な仕事だとは思っています。

6. 講演「新しい時代における人間の問題」(第20回年次大会)

(会報第29号 1995)

本明 寛 (文・1941)

第20回早稲田大学心理学会において、本明寛先生によりおこなわれた講演「新しい時代における人間の問題」を、大学院修士課程の祖父江敬子氏に要約してもらいました。

要 約

本日はたくさんの方々におみえいただきまして、感謝に堪えません。しばらくぶりに大学に参りましたら、きれいな建物ができていて驚きました。ですが、建物の中にはピラなどが貼られていて早稲田大学文学部の伝統を感じます。

本講演の演題中にある「新しい時代」とは「対話」であると思います。話をする、聞くにかかわらず、人間と人間の対話の時代ではないでしょうか。私は7年前に健康心理学会を発足させまして、近年は国際健康心理学会設立への動きも出てきました。こうした学会の発足・運営の経過をみても、対話が果たす大きな役割を意識せざるをえません。

私は最新刊の『心理学序説』のなかで「心理学の目的は"Quality of Life"である」と書きました。Quality of Lifeとは「人生、生活の価値を高めること」。Qualityという語には「質」という意味がありますが、大きな辞典には「素晴らしさ」という訳語がついています。このQualityをここでは「価値」といたします。つまり、人生の価値というものを高めるために心理学があるのです。大阪・神戸の震災で被災した中学生の作文のなかに「みんな生きていてよかったということに気がついた」という文がありました。価値にはいろいろなものがありますが、人生・生活の価値、特にその健康の価値というものがいま一番求められているのではないのでしょうか。

人生・生活の価値を高める唯一の方法は、自分をよく見ること、そして自分を見るのと同じような見方で相手の人もよく見ることです。このことを「改革と創造」という言葉で表現したいと思います。自分のことを考えるということになると、この点を直さな

ければいけないとか、あの点をよくしなければならぬというように考えることになります。これは「改革」です。そして、自分自身をよくしていくためにはどうしたらいいかということになると「創造」という言葉が登場します。このように、新しい時代においては何よりもまず人間に目を向けるということが求められます。ですから、人間の問題を扱う心理学はあらゆる学問のなかで最も素晴らしい学問だといわれるようになっていかななくてはならないと思います。

新しい時代とはいったいどういう時代なのかを詳しく見ていきましょう。

①「主体性」

会社に従順な組織人として活躍し定年を迎えた人が、その後の人生をどのように生きていくのか分からなくなることがあります。そこで必要になるのが、主体性をもつこと、自分で自分の生き方を独自に考えていくことです。

②地位と権威」(「任務と役割」)

私事ですが、中学生の頃、自分の役割を果たすことの重要性を教えてくれた先生のことを思い出します。

③「集中と分散」

集中だけでなく、分散させること、すなわちひとつの見方に固執せずに多様な見方をすることも必要です。集中は時間を短縮し、分散は長時間を有しますが、分散には行為の準備過程があるので、行為に対する予想や目標が生じ、喜びと楽しさが伴うことになります。

④to be with you (ひととともに)

to have思想はもう終わったと言われていています。物を所有することによっては幸福はやって来ないのです。最近、対話のもつ治療的役割を重視するサイコオンコロジーという学問が注目されています。サイコオンコロジーの根底にあるのはto be with you思想です。

⑤「自己を生かす」

食べるために働くのではなく、自分を生かすために働くようにならなくてはなりません。

⑥「感性」

合理的に物事を理解する知性ではなく、ひとの気持ちをピンと感知することが重要です。

⑦「健康である」

時間を惜しんで動きまわれば良いという行動力の時代は終わりました。アメリカの企業では社員全員の健康を目標の一つとしています。

このほか、新しい時代を考える際に忘れてはならないのが改革と創造です。前述したように改革は自己点検・自己認知から始まりますが、あくまで結果ではなくプロセスを重視するものです。プロセスを重視するとはどのようなことなのでしょう。答えは創造というもののなかにあります。これまで創造は「何か新しい物をつくること」とみなされてきました。しかし今日では「創造とはものまねである」と考えられています。ノーベル科学医学賞受賞者の利根川博士も同様のことを言っていますし、企業で盛んに行われているベンチマーキングにもこの思想が息づいています。但し、このものまねとは物のまねではなくひとのまねです。素晴らしいと思われるひとあるいは成功している企業があったら、その業績や実績といった結果をまねるのではなく、プロセスをまねる、すなわちひとの生き方あるいは企業のやり方をよく見てそれをそっくりそのまま取り入れることが創造するということなのです。

マルティン・ブーバーの思想は、物の時代から人間の時代へ移り変わりつつある現代を説明するのに有効です。ブーバーによると、人間は我-汝の組み合わせによって成り立ち、そこから幸福が得られます。我は我だけでは決して存在せず、また、我-それすなわち私と物との組み合わせは人間ではないのです。そして、対話が、我-汝の組み合わせをもたらす手段であるとしています。この考えはさきほどのサイコオンコロジーにも生かされています。

近年、経済大国という代わりに生活大国という表現が用いられるようになりました。生活大国の目標は、ゆとりと生きがい、安全と安心、新しいライフスタイル、美しい環境などです。一人ひとりの人間が幸せになる、そのためには人間と人間との温かいこころの交流が必要であり、それが人間を感動させる唯一のものだと思います。早稲田大学心理学教室が今後も発展していくために、皆さんも是非、時々には大学に足を向けて、先生や学生さんと対話をし、新しい時代をつくっていただきたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。

7. 収穫の多かった第20回大会

(会報第29号 1995)

岩館憲幸（東海女子短大 一文・1959）

例年と異なり、第20回大会は5月開催で、シンポジウム「阪神大震災被災者の心理」の話題提供者を頼まれている、とかねてより島津貞一先生から知らされていたことも

あって、今回は是が非でも参加しなければと考えていた。その上大会案内状には、懇親会は心理学同窓会の形式をとるとあり、久しぶりに会えるやもしれぬ顔触れに一層期待が高まった。

会場を探すのに手間取り（思えば母校には10年以上のご無沙汰でした）かなり遅れての到着、臨床心理研究部会では島津先生の、淡々とした語り口ながら、生々しい被災体験のお話が既に始まっていた。配布されたレジュメや被災地地元新聞記事切り抜き、それにAPAの「災害-対応ネットワークフェースシート」等は、被災者の心のケア活動の詳細を伝え、またそのノウハウを教えてくれる貴重な資料であった。最後に、いざという時への備えや心構えについて、実際体験した人でなければすぐには思いつかないであろう具体的でキメ細やかな留意事項や提言を、まとめとして述べられた。たとえば真暗闇の中、ガラス破片の四散する屋内の移動にスリッパは欠かせないというのは、和室を寝室としている私にはとても考え及ばぬところであった。神戸女学院大の北村圭三先生はご自分も被災者のおひとりながら、心のケアにあたる専門チームの心理臨床担当リーダーとして、献身的な被災者への精神的サポートを行ってこられたその厳しい体験や、心理臨床の立場からの援助活動の在り方について、熱のこもった報告と提言をされ、参加者に大きな感銘を与えた。懇親会では、学術会議での報告を終えてようやく間に合ったという航空医学実験隊の垣本由紀子さん、雇用情報センターの鈴木弘美君、当日のマスコミ部会で報道局長の立場から話題提供させられた読売テレビの嶋内義明君、それに私岩館の4人が同級生として顔を揃え旧交を暖めることができた。かくしてこの日5月20日は本明寛先生の講演を始めとして誠に有ることの多い1日となった。

8. ときには学生にかえて

(会報第29号 1995)

打田茉莉 (宇都宮少年鑑別所 一文・1955)

久しく教室に来ていない者には迷路のような戸山校舎の廊下や階段を学生さんに案内されて会場に入った。元神戸少年鑑別所長で本明先生と同期の島津先生から阪神・淡路地震のホットな話を聞こうとする人々で教室は満員。用意された資料はすぐ品切れとなったが、学生さんがどんどんコピーを作って配ってくださった。島津先生の資料の他に、地震直後に米国心理学会から日本心理学会に送られて来た「災害対応ネットワーク」のプリントもあった。私は、今から30年前、米国で、大火で肉親を失った人達の心のケアに関する報告や、戦争下の子供のメンタルヘルスの論文等を目にしたときのことを思い出した。しかし、「効率」で計られて弱者が切り捨てられる米国社会を故戸川行男先生が批判していらした文を、高校生のころ、総合雑誌で読んだことも思い出した。

島津先生は、お話の始めに、世の中の日の当たらない所にいる人たち相手の仕事をし

てきたと、自己紹介された。続いて、神戸女学院の北村圭三先生は、西宮地区の被災者の心のケアの実践のようすを詳細にお話になった中で、地震の数日前にユングの光りと影についての講義をなさったこと、今回の震災は人間の自然征服のおごりと影を排除してむやみに光で照らそうとする人間への怒りであると話されたことも忘れられない。

次に、本明先生の「新しい時代における人間の問題」を聞き、やはり、大学は就職予備校ではなく、世の中をリードするところ、たまに帰って来て明日からの元気をもらって行くところであり続けてほしいと思った。

学部の1年目から心理学専攻で、1年から大学院までの心理学教室の人たちは皆が顔見知りという学生時代を過ごしたが、大懇親会場で手渡された参加者リストを見て、同窓生の職域の広さに感激もした。光だ影だという区分はなく、卒業年度でいえば50年以上の開きがあっても上も下もなく、わいわいとやれた会だった。

9. 臨床心理学研究会に参加して

(会報第29号 1995)

佐藤美和子 (大妻女子大学非常勤講師 教育・1985)

会は、阪神大震災で犠牲になった方々の御冥福を祈る黙祷で始まった。神戸在住の2人の先生方の生々しい体験談と臨床心理士としての活動に関する話は大変感慨深いものだった。

私自身、2月に被災された高齢者の話を聞くために淡路島へ行ったが、めちゃくちゃに崩れた家屋群と不自由な避難所生活を送っている被災者の方々を実際に目にしただけで、身体の調子がおかしくなるくらいショックを受けた。神戸はさらに火災や都市型の被害の規模が大きく、崩れかけたビルの恐怖感はまだ続いているとのことだった。地震それ自体の恐怖感の表現も凄まじいものであったが、残された爪跡はさらに大きく、その被災体験は報道から受け取った以上に胸を苦しくさせるものだった。

個人的な体験談とともに大変興味深かったのは、北村先生による臨床心理士としての活動であった。仕事について思い立ったのは2週間後だったとおっしゃっていたが、心の相談センターを設立し、保健所と連携しての活動ぶりには本当に感服するばかりだった。その中で特に印象的だったのは、他府県のボランティアは必要時のみとし、被災体験を持つ人々で臨床心理チームを作っていたことだ。確かに、他からの援助は一時的であり、中には興味(研究)本意の人もいたようで、長期的に関わり、共感を必要とする心理臨床には難しい点多いだろう。しかし、それでよしとは言えないだろう。自らも被災している援助者も当然疲れ切っている。その人たちの心のケアは誰がするのだろうか。他府県の臨床心理士にできることはないのだろうか。大きな災害後の心のケアについて、考えていかなければならないことは非常に多いと感じた。

東京では大きな事件が相次ぎ、震災の話題がのぼらなくなってきた。しかしまだ「震災後」は続いており、忘れてはならないこと、やらねばならないことはたくさんあると思う。

10. 初めて開かれた同窓懇親会

(会報第29号 1995)

午後6時から大隈庭園にある大隈ガーデンハウスにおいて、同窓懇親会が行なわれた。約200名の参加があった。

早稲田大学心理学会が音頭を取って開催する同窓懇親会は今回が初めてであり、予想以上に多くの参加者を得たことは大変喜ばしい。一方、同級生の参加を漠然と期待していた参加者の方に、その期待を裏切って失望を味わわせてしまった面もあった。それらのことも含め、いろいろな点で参加者の期待に添えきれなかったことで力量不足を痛感している

初めての試みであったが、これを機に卒業後初めてのクラス会を開くところも出てきて大変嬉しい。卒業後何等音沙汰なく過ぎゆく学年が多い一方、定期的に何らかの集まりを持っている学年もある。いずれにしても名簿整備が先決問題である。学年毎に取りまとめ役（キー・パーソン）がいてその整備にご苦労願えるなら非常に有り難い。同窓生の縦横のつながりを機能させることが出来る上に、卒業生からのいろいろな問い合わせにもお答えできよう。今後の問題として、この辺りのことをお含みおき願えればと思う。

懇親会の企画・実行には理事2名と木村裕会長の同級生の方々とお骨折り頂いた。感謝申し上げたい。また各界で活躍している卒業生から当日のビンゴゲームの景品として多くの品物を提供して頂いた。この場を借りて感謝すると共に人間関係という"生きた心理学"の中で活躍する多くの卒業生の力を感じた次第である。同窓懇親会を通して、現実と学問とのリンクを改めて追求する必要性があろうと感じたものである。

1. 瓦版発行記録一覧

号数	発行年	発行年月日	号数	発行年	発行年月日
第1号	平成12年	2000年9月	第19号	平成23年	2011年5月
第2号	平成14年	2002年3月	第20号	平成23年	2011年12月
第3号	平成14年	2002年10月	第21号	平成24年	2012年4月
第4号	平成15年	2003年5月	第22号	平成24年	2012年12月
第5号	平成15年	2003年9月	第23号	平成25年	2013年3月
第6号	平成16年	2004年3月	第24号	平成25年	2013年12月
第7号	平成17年	2005年1月	第25号	平成26年	2014年5月
第8号	平成17年	2005年3月	第26号	平成26年	2014年12月
第9号	平成17年	2005年12月	第27号	平成27年	2015年3月
第10号	平成18年	2006年10月	第28号	平成27年	2015年12月
第11号	平成19年	2007年3月	第29号	平成28年	2016年3月
第12号	平成19年	2007年10月	第30号	平成28年	2016年12月
第13号	平成20年	2008年3月	第31号	平成29年	2017年3月
第14号	平成20年	2008年11月	第32号	平成29年	2017年12月
第15号	平成21年	2009年3月	第33号	平成30年	2018年8月
第16号	平成21年	2009年12月	第34号	平成30年	2018年12月
第17号	平成22年	2010年4月	第35号	令和元年	2019年10月
第18号	平成23年	2011年1月			

2. 会員紹介 「定年退職に際しての感想」

瓦版第4号（2003）

春木 豊（一文・1956）

29歳の時に文学部の助手にさせていただいてから、41年の間早稲田大学で生活させていただきました。早稲田大学文学部に入学してからの年月を入れると、実に50年間の長きにわたって早稲田大学にいたことになります。これからあと何年生きるかわかりませんが、少なくとも半生以上は早稲田大学にいたことになります。今の時代には考えられないことです。しかし私のように体力や才能のない人間にとっては、早稲田大学という大きな傘に守られて生活できたことはまったく幸いなことでした。この恵みに答えるべく、自分としては人に後ろ指をさされないように、懸命に研究や教育に努めてきたつも

りですが、結果は皆様方の評価を待つほかありません。ただ早稲田大学に残らせていただいた者として心理学教室の卒業生の皆様方に対してお役に立つことができなかったという反省が私にはあります。

私は昭和27年に文学部の心理学専修に入学しました。当時は心理学など世間ではほとんど知られていなかったといえます。高校の担任の先生に報告に伺ったとき、「将来は古本屋の亭主なるしかないな」といわれたのを今でも記憶しています（今も見方によっては同じ状況かもしれませんが）。しかし大変ラッキーだったのは当時の心理学教室が実に活気に満ちていたことです。赤松先生の下に戸川、本明、三島、清原、新美、浅井の諸先生がスタッフで、大学院生や学部の4年生がリーダーで、1年生から教室に出入りしていました。私も入学したとた



第6回年次大会（1981）

んにネズミのグループにスカウトされ（今のサークルの勧誘のようなものです）先輩の卒業論文の実験を手伝わされたものです。当時は今のようにサークルが少なくロールシャッハの研究グループとか、生理心理の研究グループといったように心理学教室の中で遊びながら、先輩から耳学問していたように思います。輪読会では4年生がリーダーで原書を読みました。太平洋戦争が終わり、滔滔とアメリカから新しい心理学が流入してきた時期で、卒業論文の時には当時芝公園にあったアメリカ文化センターに文献を見るために通いました。かなり最先端の情報が入っていたように思います。そのためと思いますが、私の修士論文は動物心理学年報に掲載されましたが、それがイギリスで追試されたのが私の唯一の自慢話です（Owen, S. 1963 J.Gen.Psychol）。

最近の心理学の流行振りを見るにつけ、隔世の感があります。ご同慶のいたりですが、危惧の念も禁じえません。カウンセラーになりたいということのようですが、そう簡単に考えてもらっては困りますといたいところですが。相談相手になりたいという心意気はよいとしても、カウンセリングやいわんやセラピーは泥んこになることを覚悟しなければならないしんどい世界だと思えます。

心理学という名前は民衆に知られるようになったとしても、本当のところはまだ理解されていないといえます。たとえば最近あるテレビから取材を受けたとき、ある体操の効果を示したいということで、心理学的な尺度について、体操をやる前後の数値（ある人数の平均値）の違いを示したところ、それは主観的なことでだめで、生理的な結果でないと言ったところ、それは客観的ではないと言いました。この時につくづく心理学はまだ理解されていないと思えました。自然科学の歴史に比べると心理学はまだ100年そこそこの歴史ですから、これも致し方ないと思えます。カウンセリンは確かに将来のトレンドであると

いえませんが、科学としての心理学の基礎地固めぬきには、心理学の将来はあやういと思
います。今後の心理学の発展を祈念せずに入られません。

3. 会員近況 「夢のまた夢」

(瓦版第11号 2007)

本間弘光 (一文・1947)

テレビで鳥越氏は子供に尋ねた。「怪我したことがある?」。子供「ある」。「どこを怪
我した?」。「ころんで膝のところを」。「血が出た?」。「たっぷり出た」。「人間は血がある
ものだと分かったでしょう」。何気ない会話であるが、私にはこたえた。この年末に家
内を亡くしたからである。家内は御住職から「死に顔がきれい成仏の相です」と言わ
れた。私から見ると「笑みを含んで観音様のように」であった。でも成仏って一体何なのだ。

息をしなくなると、もう人間ではなくなる。生きていたときの人間は、この世にはい
なくなってしまう。ごろんとしてそこにあつたとしても廃材と同じで、呼んでも、もう
答えてはくれない。私の一生もやがて消えうせてしまうであろう。「浪花のことも夢の
また夢」という言葉も、単なる空事の知識ではなく、実感を伴ってせまってくる。

部屋には片づけようもなく、書籍が散らばっている。ゴミの山のような。この書籍が
生きることがあるのだろうか。私がいなくなれば、利用者のいない単なるゴミの山にす
ぎない。生きている間にこの本を生かす余裕は、私にはもうない。それでもボケた私は
このゴミと格闘中である。

4. 卒業生紹介 「私の近況」

(瓦版第12号 2007)

松壽諦雲 (一文・1967)

早稲田の心理を卒業して、早36年、今は京都、大徳寺の山内の寺、龍泉庵(りょうせ
んあん)の住職をしております。大徳寺と云えば頓智漸で有名な一休さん、宮本武蔵に
剣術の極意を教えたとされる沢庵和尚(どちらも後からつけ加えられた漸)、それに一
個人の財力でもって山門を修造し、天皇ならびに時の関白秀吉が下を通る山門の上閣
に、雪駄履きの立像を置いたとし、不敬罪に問われ、切腹させられた、時の豪商で茶人
でもあった“千の利休居士”でも大変有名な寺です。私の寺龍泉庵は500年前に建てら
れた寺ですが、明治維新の時の廃仏毀釈(仏教弾圧)により廃寺になった寺を、第二次
世界大戦終了後(1951年頃)来日したアメリカ人、ルース婦人が外人の為のZen
Instituteならびに禅センターとして再興した寺で、今でも世界中から坐禅をしに人々が

訪れてくれる少し毛色の変った寺です。

そんな事もあって私もこの13年間、毎年夏になるとスイスとドイツに出かけ、ヨーロッパのプロテスタントの人々に坐禅を教えて参りました。初めは2、3分坐っただけでもそもそ動き始めたり、苛々して喧嘩し出したり、泣き出したり、最後には逃げ出したりする人がおりました。キリスト教の神秘思想では「私が無となればそこを神がきて満たす」と云って、坐禅が無心になる一つの方法になりえますが、だいたい西洋では無念無想とか不思量（ふしりょう）とかいう事は“馬鹿”になる練習をするようなもので、まるっきり価値の見出せない事になりかねないとのことでした。しかし13年も辛抱した甲斐あって日本人以上に立派な姿勢でしっかり坐るようになり大変嬉しく思った次第です。坐禅では警策（けいさく）と云って1 m位の先の平たい櫛の棒で両肩を叩き、眠気を覚まし集中力を高めさせますが、叩かれる事になれていない西洋人には良くない事と思い、最初の10年間は警策を使用しませんでした。10年たって試みに使ってみたら、その音といい、肩のほろ苦い痛さといい大好評で、ほとんどの人が喜んで我先に受けてくれたのには驚きました。

残念な事に2006年と07年の夏はヨーロッパへは行きませんでした。実は私は1歳の時百日咳の予防注射をおしりに受けた際、その研究所で研究していた細菌が入り込み、1歳から2歳にかけ合計9回も麻酔をかけずに（当時は赤子に麻酔をかける技術がなかった為）メスを体の後ろからお腹の方からも入れた為、成長するに及んで股関節が変形しておりますが、それが過労と老化のせいで悪化して歩行が困難になった為です。その際、寺や自分の将来の事、後継者の件、寺の維持管理、今迄自分1人でやってきた仕事ができない焦り、手術をして人工関節にすべきかどうか、手術に対する恐怖等、とうとう夜ねむれなくなり“うつ病”のような状態になってしまいました。禅宗では「四百四病一時に起る」と申しますが、ありとあらゆる身体症状が出、このままでは死んでしまうと迄思いました。

その時感じた事は、若く健康な時に得られた智見はあまり役に立たなかった事、修行しようがしまいがうつ状態になりかねないという事、そのような状態になって初めてその苦しみが理解できるという事でした。私は2001年より東京赤坂のNPO法人“ジャパンウェルネス”（外科医・竹中文良先生が中心になって、アメリカの手法をとり入れて、癌患者さんを精神的にサポートする会）にて坐禅の指導をさせていただいていますが、そのような患者さんと初めて同じレベルでお話しが出来るようになったと思っております。私の足の方も出来るだけ手術をしない方向で、自転車と歩行による訓練で日常生活が出来るようになる迄回復いたしております。出来れば今年中にスイスとドイツに行き、また友人達と共に美しい野山を散策したいと思っております。皆様も是非京都へ一度お出かけ下さい。

5. 会員寄稿 「ワセダは永遠に私の故郷」

(瓦版第20号 2011)

森 松平 (一文・1958)

私は「杉の子」という日本料理屋の主人である。早大には調理学部はないにもかかわらず、早大卒の料理屋さんは全国に結構あるから不思議な話である。私は昭和33年度第一文学部心理学科に入学した。4年生の夏、中退して板前ワセダは修業の道に入った。後悔はしていないが、40歳代中頃まで「卒業するんだ」と復学の夢に悩まされた。私の下宿先は戸山町13番地で大学と至近距離にあった。水戸出身の柳内家に寄宿し、ここで初めて納豆の味を憶えた。昭和55年、私が「杉の子」を創業してから11年目、私の店に柳内のばあちゃんが訪ねてきて、「良かったね、自分の店が持てたんだから中退して良かったわ。卒業していたら、こんなになるとは限らないわよ」と私を励ましてくれた。これでやっと悪夢から解放されることになった。

全国の食べ物屋さん呼びかけ、平成12年に早大本部で「食べ物屋稲門会」を設立した。毎年全国各地で総会を開催し、情報交換、親睦を図っている。新宿「くらわんか」(安田校友)の折、講師の谷澤健一氏(元中日)が「早大野球部の集まりにおいて、自己紹介は卒業年次ではなく、必ず入学年次です」と語り、満場大爆笑となった。紆余曲折あって、私は昭和56年推選校友となり、卒業生名簿に記入されることとなった。

この頃は早大百周年記念募金の最中で、実行委員長の三木一郎先生と出会いがあり、後年、長男耕一郎(昭和62年、政治)の就職相談のご縁を持った。長女省子(平成元年、一文西洋史)も宮崎西高から進学し、無事卒業してくれて、有り難いと感謝している。小林源さん(昭和37年一文心理)は、昭和61年8月号早稲田学報「人・ひと・ヒト」の欄で、「あとは卒業を待つばかりである」と我が一家を紹介してくれた。入学以来の縁は今なお家族ぐるみで健在だ。

食べ物屋稲門会は大学公認の職域稲門会入りし、商議員も2名となった。現会長の安田氏と私である。125周年募金委員も兼ねて、募金活動を楽しんだ。記念ボトル麦焼酎「杜へ」も生まれ、1万本完売し、利益金は全額寄附し、全国でも宮崎県校友会はトップクラスの評価に寄与したようだ。寄附する喜びは早大が教えてくれた。心理学科は中退しても、経営哲学、料理哲学はしっかりと活かされている。「いかにして集客するか」、「いかにして良き人間関係をつくるか」、「いかにして人を喜ばせるか」。私は心理学教室で沢山の友人に恵まれた。故人と



なった河野昭君、藤田善太郎君は畏友であった。私の知らない事をいろいろと教えてくれた。ワセダは永遠に私の心の故郷である。

6. 追悼 本明 寛先生

(瓦版第23号 2013)

早稲田大学心理学教室の発展・充実に大きな貢献をされた本明寛先生が、昨年12月6日に逝去されました。94歳でした。3人の方に本明先生を偲んで思い出を語っていただきました。

1. 「本明先生を偲ぶ」

春木 豊 (一文・1956)

本明先生の最後を知る弟子として、この追悼記をしたためます。

先生は11月末に危篤状態になられ、それから1週間後の12月6日午前11時9分にご家族に看取られながら、永眠されました。享年94歳7ヶ月でいらっしゃいました。12月12日通夜、13日告別式がご自宅の近くの宝仙寺の斎場で行われ、約500人の方々のご参列がありました。墓地は日暮里の団子坂にある善性寺です(先代のご住職は先生の教え子です)。

最後のご様子ですが、渋谷のセントラル病院松壽に入院されておられました。危篤とお聞きして、駆けつけますが、すでに全く反応がない状態で寝ておられ、心拍や呼吸も弱い状態でした。しかし娘さんが「息を吸って～吐いて～」と声をかけると、驚いたことにかけて語に応じて、呼吸計が大きくふれるのでした。以前から頑張り屋の先生でしたが、最後まで頑張っているなあと思いました。また私が「春木です！」と耳元で声をかけたところ、じわーっと涙を流されたことには驚くと共に感動に包まれました。

先生は第二次世界大戦終了後の早稲田大学心理学教室の復興に、教室の創立者(昭和6年)の赤松保羅先生、戸川行男先生と共に中心的な存在として活躍されました。私が入学した昭和27年時には、三島二郎先生と共に助教授でしたが、心理学概論など教わりました。そのときのテキストは戸川行男・本明寛著「心理学要説」(金子書房、昭和25年)で、行動主義の考え方やゲシュタルト心理学の説を解説したもので、新入生の私は



第6回年次大会 (1981)

むさぼるように読んだことを思い出します。今見ても当時の心理学概論書としては、先端に行く優れたものだったといえます。

私は当時アメリカから入ってきた行動主義心理学こそ科学としての心理学だと思い（もちろんそれがすべてではなく、クラスメイトの岸田秀のようにフロイトの原著の読破に励んでいた者もいました）、1年生のときから、当時4年生で卒論実験をやっていた平井久先輩のネズミを使っての条件づけの実験を手伝いました。実験室は木造の小屋で、飼育室もありました。ネズミの飼育は当番制で、1年生の私は正月にも餌をやるために出かけたりしました。本明先生ご自身の指導はありませんでしたが、これらの施設は本明先生によって立てられたと聞きました。これからの心理学はこのような研究が必要だとの認識を持っておられたためと思います。

心理テストはやはり新しいものとして、当時早稲田大学心理学教室では盛んに研究されました。戸川先生は絵画統覚検査（TAT）、本明先生はロールシャッハテストで、いずれも早大版が作成されました。本明先生はその後もいろいろなテストを作られましたが、私も大学院の時代にダイヤモンド社の職場適応性テスト（DPI）の作成をお手伝いしました。その後織田正美先生が改良され、今でも使われているとのことですが、原版を作った1人として、誇らしく思います。

先生は明るい性格の方で、社交家でした。学会以外の人たちとのお付き合いも多かったといえます。お酒は強いというよりは、人を集めて、酒席を楽しむということでした。新宿や渋谷に行きつけの店があり、私も末席に連なることがしばしばでした。先生は基本的には朝5時に起きて原稿を書くということで、一般向けの本を書くことが趣味だったといえたかもしれません。マスコミにもよく登場されていました。しかし釣りだけは好まれていたようで、私も自動車の運転手として、多摩川や千葉の方の沼にお供したことがありました。

先生は基本的には負けず嫌いの頑張り屋さんであったといえます。今思えば先見の明があったといえますが、定年直後に健康心理学会を設立され、次々に国際会議など開催され、大変なご努力だったといえます。このことは上に述べたように、ご臨終まで続きました。

先生は大学や学会のみならず、官公庁でも、いろいろな役職を歴任されました。ここではいちいち述べませんが、このために紫綬褒章や瑞宝章など叙勲されています。

今思うに先生のようなタイプの教師は、これからは出ないことでしょう。学問以外にもさまざまなことをお教えいただいたことにいまさらながら感謝申し上げる次第です。衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

2. 「本明 寛先生と岡村喬生氏とブーケの話」

小林 源（一文・1962）

昭和35年か36年のことだったと思う。イタリアで開催された国際心理学会の折、本明

先生が出席された。帰国の集まりで語学の大切さを実感された旨話され、かつ欧米の出席者たちは複数語駆使することが珍しくないと言われたことが記憶に新しい。かくして我が本明先生は、現地滞在中、早稲田大学卒業後イタリア留学中の、いわば“広義の”教え子に（人を介して）出会い、そのお蔭でイタリア語を必要とする諸事をことごとく処理することができた、と伺った。

それから20年ほど経た、昭和55年か56年頃のこと、長年知遇を得てきた岡村喬生氏との話中で、私の出身学部、専攻、卒業論文とその指導教授名まで触れたところで、同氏が突如、私の話を遮るように、本明先生と言えばイタリアに来られた時、通訳にあたったのはオペラ留学中だった私だよ、奇縁だなアと告げられたのだ。この時の驚きは今なお忘れ難い。

ちなみに岡村氏は政経学部新聞学科をご卒業だが、実態は学生生活の大半をグリークラブ（部？）で過ごされた由で、その後イタリア留学で幾多のコンクールで優勝を重ね、ドイツへ渡り通算20年もの欧州を舞台の歌手生活をつづけられ、今や日本を代表するオペラ歌手、そして海外進出の草分け的存在としても知られる。母校の誇りでもある。

ところで同氏は毎年、上野文化会館小ホールでの「冬の旅」全曲演奏をライフワークとしておられるのだが、そのことのあった直近の同演奏会に、今で言うセレブで上品な中年婦人とそのお嬢さんが大きなブーケを抱え会場に現れていた。誰だろう、そのおふた方は、本明先生の奥様とお嬢さんだったのだ。岡村氏が殊の外喜ばれたのは申すまでもないが、20年をかけて経回った人の縁に私は思い入った。



岡村喬生氏（政経卒）

3. 「本明寛先生の思い出」

木村 裕（一文・1965）

先生の指導を受けたいと思い始めた頃、相談に乗って頂きたくて研究室に伺った折りに、自分の気持ちそのままに「でも、ひとの心にじかに触れようとするには自分には許されていないような気がしています」というようなことを言ってしまったと覚えています。聞きようによっては教を請う心理学徒にあるまじきとんでもない申し上げようだったと今は思うのですが、先生は学習の分野でやってみてはどうでしょうという意味のことを仰って下さいました。以来ずっとラットを用いる実験分野に関わり続けて参りました。

日本心理学会が発足してごくごく初期の頃の大会発表論文集はガリ版刷りのものだったと思います。そんないかにも手作りふうの資料集の中に、本明先生が、ラットにY迷路の学習を課してチョイス・ポイントでの電撃がラットの選択行動にどう影響するかを調べる実験を報告して居られるのを見つけた時の強い印象は今でも当時と同じように思

い起こします。動物実験を含めて広く行動を扱う基礎的実験研究の必要性を先生は強く感じて居られたとっております。

大学院生を終わる頃にある大学の非常勤講師の仕事をお世話下さいました。実験しかやっていなかった身には初めての心理学の講義の担当はとんでもなく緊張することでした。準備した講義の内容を見て頂きましたが、原稿の何ヵ所かにうっすらとアンダーラインを引いた状態で、これで良いよと手渡して下さいました。私はアンダーラインの意味をどう判断したら良いのか自分なりにあれこれ考えながら書き直しました。

それ以来この文章チェックのスタイルは他の全ての原稿についてもずっと変わらずに続きました。

大学院ゼミ生の全員が顔を見せる夕食会は飲み物も食べ物もいろいろそろって自由に遠慮のない発言のできる楽しい集まりでした。外食のこともあれば研究室でのこともありました。

今や私はすでに定年を迎えてしまっておりますが、先生から多くの事を学びました。ゼミ生や年ごとに変わっていく学生諸君とのおつき合いの仕方なども、ずーっとおそらくすべて先生をモデルにしようとしてきたんだなあと感じております。

7. 訃報 浅井邦二先生

(瓦版第27号 2015)

石井康智 (一文・1970)

浅井邦二先生が2014年12月17日に逝去されました。(享年90歳)

先生は、早稲田大学文学部哲学科心理学専修を卒業され、人事院を経て、早稲田大学文学部、及び人間科学部で教員として学生の研究指導をされながら、大学・学部の要職に就いて大学運営にも深く関わりました。1987年の人間科学部開設に際し、準備室長として尽力し、初代人間科学部学部長として文学部から移籍しました。

早稲田大学心理学会設立にも尽力され、昭和40～50年代の学会活動を支えられました。生粋の早稲田マンとして、大学野球やラグビーのスポーツを欠かさず見られたように早稲田大学への熱いものを秘めておられていました。退職に際しても早稲田大学に教育基金として多額の寄付をされました。

実生活全般では、他者に迷惑をかけないで生きることを実践し、自分の最後のことまで考えて行動された先生でした。オーストリアの精神科医ヴィクトール・フランクルの言葉を座右の銘として実存的精神を実践する方でもありました。



第6回年次大会（1981）



第31回年次大会懇親会（2006）

8. 都市と故郷をつなぐ

（瓦版第27号 2015）

（株）まちづくり小浜 おばま観光局 取締役企画経営部長 朝倉昌也（一文・1979）

私は、広告代理店博報堂にて、各種企業の広告販促計画、商品開発や、企業のPR施設、文化・スポーツ施設、イベント・博覧会・展示会、全国の観光・まちづくりなどの事業開発に携わっていました。日本各地や世界各国を飛び回る日々。世界各国の良さを知れば知るほど、日本や田舎の素晴らしさにも魅せられていきました。生まれ故郷の父がなくなったのを契機に、15年くらい前から故郷のまちづくりも始めました。都市生活の快適さもいいのですが、今でいう地方創生をやらないと日本は辛くなるなあという思いの方が、加齢とともに増してきました。無謀にも48歳の時に早期退職をして、今では妻子の迷惑を顧みず関東に残したまま、単身故郷のまちづくりに没頭しています。

故郷とはOBAMAさんやNHK朝の連続TV小説「ちりとてちん」で少し有名になった福井県小浜市という人口3万人の小さな町。京阪神の方には少し知られていますが、関東の方にはどこにあるかもわからない町です。朝鮮半島の方から地図で日本を眺めてみてください。一番近いのは九州ですが、対馬海峡を、対馬暖流に乗って進むと京に入るのに便利なのが若狭湾だというのがわかります。この若狭湾の中央に小浜はあります。

3月2日は、小浜神宮寺・鶴ノ瀬の「お水送り」です。春を呼ぶ神事で、3月12日の奈良東大寺二月堂若狭井から汲み上げる「お水取り」の水を送ります。律令時代から小浜は大陸の仏教、文化、物資を運ぶシルクロードの港として、また淡路、志摩と共に御食国（みけつくに＝御食を貢ぐ国）として、京とつながっていました。小浜、京都、奈良、熊野が南北に一直線でつながっているのもうなずけます。

京の台所、錦市場に行くと現代でも若狭ぐじ＝甘鯛、若狭がれい、小鯛の笹漬けなど小浜からの魚が並んでいます。これらは鯖とともに鯖街道によって運ばれ、京野菜と出会い和食文化が花開いたのです。

若狭湾はリアス式海岸ですので、たおやかな自然、海、夕日が美しいところです。古い町並みや国宝・重文も数多く、神仏混淆文化が残り、日本の塗り箸生産の大半を占める若狭塗箸など見所も豊富です。

私は、「温故創新」と呼んでいます。古き良き日本の文化や食を大切にしながら、現代に役に立つ「食、祭、文化、さとうみ体験」を企画開発し、都市と小浜の人をつなぐまちづくりを行っています。若狭塗箸研ぎ出し体験、鯖寿司づくり体験、鯖寿司食べ比べクーポン、語り部とまち歩き・小浜ぶらり、若狭の秘仏特別公開などが人気です。これからは日本を訪れる外国のお客様にも来ていただこうと考えています。

小浜の農林水産業や観光・まちづくりに携わる人々と連携し、自らも道の駅「若狭おばま」を経営したり、自社農園で果樹・野菜を育てながら、食や観光商品を協同開発し、都市の広告会社やメディアなどのネットワークを駆使して、情報発信を推進しています。日本のそして世界の人々に現代に生きる活力や癒しを提供し、地方から日本を元気にするお役に立てればと、残された人生を捧げることにしています。是非一度、若狭おばまにお出かけください。



秋のマスコミキャラバン（ラジオ出演）



小浜湾の夕景



神宮寺・鵜ノ瀬のお水送り



鯖寿司づくり体験



秋の精進料理づくり体験

9. 戸山キャンパス昨今「タイサンボク—卒業して50年— —文哲学科心理学専修1966年卒クラス会」

(瓦版第29号 2016)

西本武彦 (一文・1966)

文学部のスロープを登り切る少し手前、左側に大きなタイサンボクの樹がある。このタイサンボクは50年前の昭和41年（1966年）春、われわれが卒業するときに植樹したものである。文学部が本部キャンパスから戸山キャンパス新校舎に移転したのが昭和37年。新校舎の一期生だったが、記念会堂での卒業式はなかった。前年末から大学紛争が始まり、年明け1月から全学スト、2月本部封鎖、機動隊が導入されて200名以上の検挙者という騒然とした状況（いわゆる第一次早稲田闘争）の中で学園を巣立つことになった。

多士済々、同級生46名の結束は固く、文学部で学び心理学教室に籍をおいた4年間で植樹という形で残したいと思い、当時まだ殺風景なスロープ脇に何本かの苗木を植えた。植樹式の写真には故人となられた戸川行男先生（白髪の後ろ姿）や本明寛先生、富田正利先生の姿も写っている。当時の苗木はいま、幹の太さ40センチ以上、高さは7メートルを超えるまでに育った。春になると隣の桜と並んでスロープを彩っているが、その謂われを知る人はほとんどいない。

卒業してからもクラス会を、ほぼ毎年開いてきた。1人ももらすことなくクラス全員の名簿を常に更新しているのが自慢である。日米宇宙中継の最初の映像がケネディ大統領暗殺（昭和38年）、翌年は東京オリンピック、相撲は大鵬vs柏戸の世代だから、積み重ねた50年は立派な歴史であろう。



卒業時の植樹式（1966年3月）



現在のタイサンボク（2015年10月）

言われるまでもなく古稀を過ぎて、そろそろ骨董品に近づいてきた。折しも大学主催のホームcomingデーの知らせが来たので、それに合わせてキャンパスツアーを兼ねたクラス会を開くことを決め、昨年10月18日（日）に集まった。当日は天気恵まれ、大隈ガーデンハウス3階のカフェテリアで旨いランチを食べ、エスカレーター付き高層校舎が立ち並ぶキャンパスに驚き、演劇博物館や中央図書館で母校の伝統を再認識して、昼の部を賑やかに過ごした。歓談しながら、時の話題のマンション杭打ち偽装が、いつのまにかインプラントの話になって大笑い。やはり歳はあらそえない。

10. エッセイ「アメリカ便り (1)」

(瓦版第29号 2016)

黒坂和彦 (一文・1986)

大学卒業後に約29年在籍した会社を退職して1年が過ぎました。この会社では、幸運にも34歳から約7年間、香港に駐在する機会に恵まれました。駐在している間の充実した日々が忘れられず、52歳の時に転職活動を開始し、縁があって、四国に本社のある450名程の会社に、2015年1月に転職しました。四国や東京での勤務を経て、2015年11月下旬にアメリカのニュージャージー州に赴任したばかりです。



自宅アパート (左) とオフィス (奥の茶色いビル)

オフィスは、同州のフォートリーという街にあり、住宅もほぼ隣接したアパートに決めました。徒歩5分もかからない距離です。フォートリーの人口は約4万人弱で、約2割が韓国系住民です。80年代は日本人の比率の方が多かったそうですが、様変わりしました。それでも、韓国系の飲食店が多い中、ラーメン、そば、すしといった日本食のレストランが点在しています。

車で15分ほどかかりますが、隣の街にはミツワ (旧ヤオハン) という大型の日系スーパーがあり、日本人が生活するには便利なところ。同州には、大型のショッピングモールも多く、ニューヨーク市のマンハッタンより、衣類やブランド品等の買物については、ゆっくり選ぶことができ、環境が良いと思います。また、風光明



クリスマス前後の
NY ロックフェラービル

媚なスポットも多いようです。暖かくなったら、訪ねてみる予定です（今朝は-11℃でまで冷え込みました）。

ニューヨーク市とフォートリーとは、ハドソン川を挟んで隣接しており、マンハッタンには、バスで乗って1時間程度で到着します。土日にはマンハッタンに出て、これまでミュージカルやスポーツ観戦（WWE）を楽しみました。メトロポリタンやグッゲンハイムといった世界的に有名な美術館もあり、これから時間をかけて観賞したいと考えています。色々な文化に触れることができる環境であり、有難く思っています。

先日、アメリカの最大の書店チェーンである、バーンズ・アンド・ノーブルに、ぶらりと寄ってみました。心理学（Psychology）関連の書籍の取り扱いが、非常に多いのに驚きました。日本の大型書店とは、配分が明らかに違います。書棚4つ程度が心理学の本で占められていました。私は池袋のジュンク堂や、高田馬場の芳林堂に良く行っておりました。前の会社で管理部門の仕事に携わっていたので、法律や会計の書棚を中心にすることが多く、参考になる書籍が数多くありました。

それに比べ、こちらでは、心理学の扱いの方が大きいです。法律関連の書籍の扱いは、心理学の1/4程度でしょうか。現在のアメリカでは、実用的な知識より、人間の心や行動についての関心が高いのではと感じました。ちなみに、哲学（Philosophy）の取り扱いも、心理学とほぼ同様でした。

前述のとおり、私は11月下旬に赴任しましたが、家内が12月下旬に渡米し、身の回りの世話をしてもらえる状況になりました。23歳と19歳の娘はもう大人ですから、日本に置いてきましたが、ライン等でコミュニケーションを図っています。現地に早くなじめるように、家内を色々なお店に連れてっています。総じて外食は量が多く、この前のランチは、2人で分けました。コーラも量が多いので、分けました。自動車やバスでの移動が多く、歩く機会が少なくなりましたので、健康維持のため、アパートにあるジムで、今のところ毎日汗をかいています。

それでは、次の機会に、こちらの様子を、また報告させていただきます。

11. クラス会便り「石井康智先生を囲む会報告—石井先生退職に寄せて—」

（瓦版第31号 2017）

川越博夫（一文・1981）

「石井さん、野球の試合で脚を骨折し入院中なので実験レポートが提出できません。」
「石井さん、就職は決まっているのに卒論の先生から『この卒論では…』と言われ途方にくれています。」「石井さん！…」

これらは1981年心理学教室卒業の学生達から石井康智先生へ寄せられた必死の相談で

した。そう、当時、石井先生は心理学教室の「助手石井さん」でありいわば学生のためのコンシェルジュだったのです。

その石井先生が2017年3月に心理学教室を退職されることを知り「81年卒で石井先生に感謝の気持ちを表したい」との気運が高まりました。何しろ石井さんにお世話にならなかった学生はひとりもいないのですから…。まず「会の企画」です。「石井さん退官につき皆で集いましょう」と元学生連中に発信したら「退官は公務員言葉だからおかしい」とか「同期会と混同するのは反対だ」とか流石、元早稲田の学生、いろいろと忌憚らない意見を出してきます。ワクワクです。

あーでもないこーでもないとやっているうちに2016年9月の土曜日の午後に大学で打ち合わせをすることになりました。そうしたら石井先生が「僕も参加してもいい?」。というわけで教授の謝恩会の企画にその当人の教授が参画することになりました。これってあり?失礼にならない?そこが石井先生たる所以ですね。

夜の参加は難しいという声に応え昼・夕方・夜という3部構成にしました。この企画は80年卒の方たちの企画のパクリです。(西本和恵先輩ごめんなさい)

特筆すべきは織田(旧姓石井)純子さんのその超人的な情報収集能力の発揮です。何しろ校友会への働きかけや石井先生からの卒業生名簿などから同期74名のうち71名に案内を発信することができたのです。さすが優等純ちゃん、我らの誇り!

11月12日(土)昼にまず13名で鶴巻町のそばやさんにてランチ。写真家の平尾秀明くんに卒業式謝恩会集合写真の再編集を披露していただきました。その後散策(何とコース設定、ガイドは石井先生です。)済松寺(家光創建)、矢来公園(杉田玄白出生地)、多聞院(松井須磨子墓碑)、宗参寺(山鹿素行の墓碑)、漱石公園(夏目漱石終焉の地)そして漱石生誕の牌。学び舎の近隣にこれほど多くの見学ポイントがあるとは。さらに夏目坂ふもとの小倉屋酒店。漱石の小説「硝子戸の中」に出てくるそうです。

続いて夕方の部、16時に文学部キャンパスに集合・合流し2015年9月に完成した新心理学教室へと向かいました。当時の心理学教室の面影はほとんどなくその近代的な設備の前にただただ時の流れを感じざるを得ませんでした。しかし皆んな還暦が近づいてい



昼の部・ランチ後の漱石公園(撮影 平尾秀明)



夜の部・フランス料理「ラ・フォンテーヌ」(撮影 平尾秀明)

るということも忘れて学生の顔になっています。

いよいよ時刻は18時、弦巻町のレストランで夜の部の開始です。集まりました30名。司会は言わずと知れた吉原（旧姓石田）みゆきさん。野木崇宏君の乾杯で石井先生に「感謝とねぎらい」を伝えます。各人からも口々に石井先生に対しての感謝が述べられました。

「35年の時を経て逢うことができた元学生が半数いたが、それぞれの立場で苦勞してきても同じ釜の飯を食べた同窓が一気に学生時代の雰囲気をつくり渦が巻いた。「感謝感謝」と後に石井先生からメッセージを頂戴しました。フィナーレは何といても庄司珠緒くんの発声による「都の西北」の大合唱と石井先生へのエール、大変見事でした。井上聡君の歌唱誘導にも感謝です。

石井康智先生、我々が初めて聴講する石井先生の講義が先生の最終講義であり、またその日が先生の文学部入試の日と同じ2月25日であるということのを忘れることはないでしょう。石井先生の早稲田の α （アルファ）であり Ω （オメガ）の日です。

今はもうおりませんが私の伴侶の同期（旧姓・伊東桂）とともに石井康智先生にこれまでのご厚誼を深く感謝申し上げ、先生の今後の益々のご発展・ご活躍を心よりご祈念申し上げます。

12. 「泣いた赤おに」の物語を読んで連想したこと

（瓦版第32号 2017）

今泉岳雄（一文・1972）

筆者は今年の3月まで6年間、山形県にある小さな私立大学に教員として勤務していた。その縁で在任中に、山形県出身の童話作家浜田広介作の「泣いた赤おに」について臨床心理学の立場から話をしてほしいと広介童話研究会より依頼されたことがある。

筆者はこの作品のあらすじは知ってはいたが、きちんと原作を読んだこともなければ、浜田広介については何の知識も持っていなかった。しかし、「泣いた赤おに」がなぜ今でも広く読み継がれているかについては興味を持ったので、この機会に原作に触れてみようと思い依頼を引き受けた。その後原作を読み、浜田広介について調べる中で、「泣いた赤おに」は最初は「おにのさうだん」のタイトルで1933年に発表され、翌年には「鬼の涙」と改題・書き直され、その翌年から「泣いた赤おに」として話の大筋は残されつつ、広介が80歳（1973年）の生涯を閉じるまでに、何度となく細部が改変されながら雑誌や本に発表され続け、今日に至っていることを知った。広介の没後40年を過ぎた今も絵本や童話集の形で発刊は続いている。また、2011年には「泣いた赤おに」の物語を下敷きにした山崎貴と八木竜一合同監督による3DフルCGの「friends もののけ島のナキ」が映画化されている。さらに2015年にはNHK山形放送局制作の「私の青おに」

が放映されている。小学校の道徳の授業の資料としても1962年に文部省の「小学校道徳資料4 小学校道徳読み物利用指導I（低学年）」で取り上げられて以来、現在でも学校図書、光文書院、文溪堂、光村図書の副読本に入っており、対象も低学年から高学年に広がっている。道徳の資料としては簡略化されているが、2011年の教育出版の「小学校2年生」の教科書には全文が掲載されている。

このように、今でも「泣いた赤おに」は読み継がれており、多くの方が物語を知っていると思うが、以下に物語の概要を紹介してみたい。

村近くの山の崖に住んでいる若い赤鬼は、絵本に描いてあるような鬼とはだいぶ容姿が違っていたが、やはり目は大きくて頭には角の跡らしいとがったものがついていた。彼は、鬼だけでなく人間とも仲良くなりたいと思い、「自分がやさしい鬼であり、おいしいお茶やお菓子を用意しているので遊びに来てほしい」と立札を出す。しかし、村人は恐れて遊びに来ないので、腹を立てて立札をへし折る。ちょうどその時に、はるか山奥から訪れた友人の青鬼は、その理由を知って、自分が村で暴れるからそれを追い払う役を赤鬼が行い、村人の信用を得るようにしたらどうだろうと提案する。赤鬼は躊躇するが、「なにか、ひとつのめぼしいことをやり遂げるには、きっと、どこで、痛い思いか、損をしなくちゃならないさ。誰かが、犠牲に、身代わりに、なるのでなくちゃ、できないさ。」と、もの悲しげな目つきを見せて、青鬼は言い、実行する。その結果、青鬼を追い払った赤鬼を村人は信用し家へ遊びに訪れるようになり、赤鬼からお茶やお菓子をご馳走になる。しばらくして、赤鬼はその後青鬼が姿を見せないことが気になり、青鬼の家を訪ねてみる。しかし、青鬼の姿はなく、家の戸に「自分がいると君が村人に疑われるので旅に出るが、いつまでも君を忘れない。いつまでも君の友達 青鬼」と書いた張り紙がされていた。それを何度も読んで赤鬼は涙を流す。

この物語が一般読者にも教育の場においても読み継がれてきた理由として、「青鬼の自己を犠牲にした献身的な友情」(文部省小学校道徳の指導資料 第2集1965)が読者の心に訴えることがあげられる。しかし、筆者は作品を読み返してみて、それに対する違和感とともに、様々な連想が湧いてきた。

違和感のひとつは、青鬼の一方的な行為である。自分が悪役になる提案をし、それに従った赤鬼が村人に受け入れられるという目的を遂げると、赤鬼に予告なく貼り紙だけを残して姿を消してしまうのである。この行為が「自己を犠牲にした献身的な友情」として読者の感動を引き起こすのであろうが、本来友情とは双方向的なものであり、青鬼の一方的な行為は赤鬼の意思を確認しない独善的なものにも感じた。実際、道徳教育の行われる学校現場でも、高学年になるにつれ「これが本当の友情と言えるのか？」ということが議論のテーマになってきているようである。個の尊重が謳われるようになった戦後の民主主義教育においては当然起きる疑問であろう。

幼い子にとっては、青鬼が突然姿を消すことは、母親などの大事な人が突然いなくなるという対象喪失の不安を喚起するため、心に残る物語となっているのではないかと

感じた。この突然の別れによる物語の終結は、読者にその後の物語を様々に連想させる。実際にその後の物語がインターネットにいくつか示されている。この作品がその後の物語に自己を投影させやすいことも、この作品が今も広く読まれている一因になっているように思われる。

筆者がこの物語を読んで一番心が動いたのは、主人公が鬼としては頭に角の跡らしきものがある中途半端な容姿をし、人との関りを求めながらもなかなか受け入れられず悩んでいるところから物語が始まる点である。赤鬼の状況描写は、主に東北地方に伝承される「鬼の子小綱」の「片子（小綱）」を想起させる。「片子（小綱）」とは、宮城県の仙台市に伝わる話では、鬼と日本人女性の間に生まれた半人半鬼の子どもであり、自分の母親を鬼が島から人里に戻す手助けをしたものの、その姿から村人に受け入れられず、最後は自分の身体を犠牲にして鬼から親を守り自殺する話として残っている。この話から、「片子」とは、鬼の社会にも人の社会にも帰属できないことから、パークの言う「異質な諸社会の境域に立ち、いかなる社会にも十分に帰属できないマージナル・マン（周辺人・境界人）」と解釈できよう。現代のマージナル・マンの例としては、白人と黒人の混血児ムラトー、西洋人と東洋人の混血児ユーラシアンなどが挙げられる。

赤鬼も典型的な鬼とは容姿が異なり、青鬼のように村からはるか離れた山奥に住むのではなく、村近くの山に住んで村人と交流を持つことを願いながら受け入れてもらえぬ状況を考えると、容姿の点でも社会への帰属という点でも「マージナル・マン」として解釈できないであろうか。マージナル・マンは片子のように差別の対象となる。村人が赤鬼の家を訪れるようになって、赤鬼だけが村人を接待する一方的な関係は、両者が差別を前提に関係を持つようになったとも考えられる。島崎藤村の「破戒」の中に、一般人は穢多の家を訪れても穢多の出す茶は飲まないで、穢多の方もあえて茶は出さない習慣が描かれているが、村人が赤鬼の茶や菓子を食べてあげるだけでギブアンドテークの関係が成り立ったとも考えられる。

このようなことを考えると、「泣いた赤おに」を、社会に受け入れられない、移民や外国人や帰国子女や障害児者や不登校児など、現代の日本の問題と関連付けて読むこともできよう。また、作者浜田広介自身が赤鬼に投影されているのではとの連想が広がってくる。

広介は米沢の旧制中学校に入学する時に家族から離れて母親の従妹のさよの世話になるが、その後すぐに両親が離婚し母親ときょうだいは家を去る。また、中学卒業後家族への想いを断ち切って上京し、後を追って上京したさよの援助を受けながら自分の身を立てるために精力を注ぐ。広介の娘である浜田留美は父の生涯について書いた著書（「父浜田広介の生涯 筑摩書房 1983年」）の中で、自己を生かすために家族との「断ち切りがたいきづな」を犠牲にして上京した哀しみを持つ父とこの作品を重ね、山形と東京の狭間で揺れる父を赤鬼の中に見ている。広介も以上の理由からマージナルな存在であったと言えよう。

それ以外に、父為助と関連付けることもできよう。為助は仕事を嫌い、家庭を顧ることがなかったために、広介の母やすと離婚に至る。その後、破産して村はずれの追兼橋（おっかなばし）に掘っ建て小屋を建てて1人で住んだことから、村人に「追兼橋の奇人」と呼ばれていたと言う。村里近くの山に住む赤鬼と重ならないであろうか。

「マージナル・マン」はライフ・サイクルの視点から青年期を指して使われることもある。大人の文化や価値観を疑うことなく信じていた子どもの時期を脱し、大人の文化や価値観への不信・反発が生じる、子ども文化と大人文化の境界にいる青年を、レヴィンは「マージナル・マン」と呼んだ。エリクソンが青年期を「社会的責任を一時的に免除あるいは猶予され自分のアイデンティティを迷いながら探し求めているモラトリアム（猶予）の時期」と捉えた概念に近いものがある。

これを踏まえて、赤鬼を「ライフ・サイクル」の視点から大人になる前の青年期にある「マージナル・マン」として見ることも可能ではなかろうか。赤鬼が自分の「アイデンティティ」を、鬼のために良いことをし、人間とも仲良く暮らす存在になることに求め、立札に自分がやさしい鬼であることを記す。しかし、立札を読んでも警戒する村人に腹を立て、立札を引き抜いて踏みつけて割るほどの怒りを見せる。このように自分は良き鬼であると語りながら、意に反することに簡単に腹を立て良き鬼像が破綻をきたすなど、まだ求める自我像が内在化されていない青年期の未熟さを示す。この未熟さは、鬼を警戒する村人に対して、ただ立札を立てて待つだけで、他の主体的な働きかけに思いが及ばない点にも認められる。「君にすまない。」と言いつつ、青鬼の提案にあっさり乗って偽りの演技を行ってしまう所にも、赤鬼の主体的自我は感じられない。村人との交流が生まれるようになって、先述したように赤鬼が村人に茶や菓子を一方的に供するだけである。村人が都合よくたかる描写であると感じる一方、赤鬼が村人と対等で双方向的な関係を結べない未熟さが窺える。

青鬼が姿を消し赤鬼は友達を失うことになるが、ここで初めて赤鬼は真の孤独に直面し、自己についての内省が始まるのではなかろうか。今までは良き鬼とは何かを深く考えることもなく、自分はやさしい鬼と思い込んでいた。しかし、青鬼に去られたことで、赤鬼は自己の生き方に直面せざるをえなかったのではないか。青鬼は自分にとってどういう存在であったのか、偽りの演技をして村人の信用を得たことはどうであったのか、これから村人とどうつきあっていけばよいのかなど、赤鬼に多くの内省が生じ、アイデンティティ獲得へむけての自分の模索が始まるのではなかろうか。この作品はその後の赤鬼と青鬼の物語が次々と連想される性格を有している。マージナルな存在であることは、被差別的な立場に追いやられるだけでなく、脱差別の方向を志向することにもつながる。どちらの世界にも属せないが、逆に2つの世界に深く関わりながら、どちらにも埋没しないことで、自己の輪郭を明確にし可能性を広げていく物語を紡ぎだせるように思える。

以上、赤鬼を中心にマージナル・マンの視点から書かせていただいた。青鬼について

は「トリックスター」や、広介がこの作品を書くきっかけになったと述べている「恵喜童子」の視点から考察したらおもしろいと思うが、長くなるので割愛し筆を置きたい。

13. 「ふつう」というもの

(瓦版第35号 2019)

横浜市戸塚地域療育センター 平野亜紀 (旧姓・近藤) (一文・1989)

私は現在、横浜市にある地域療育センターで、ソーシャルワーカーとして勤務しています。発達障害のこどもとご家族への相談支援に関わる一方で、地域の保育所や幼稚園、小学校を訪問するのが仕事です。あえて診断がつくほどではないにもかかわらず、指導者が手を焼いているこども達に出会うこともしばしばです。そこで、自分自身も子育てを経験した上で、発達障害をめぐり考えてきたことを、この機会に述べてみたいと思います。

発達の問題（あるいはその可能性）を指摘されて就学までに療育センターに相談に訪れるこどもの割合は、今や横浜市では担当地域における幼児人口の実に10%を越す勢いとなりました。子育てに悩む保護者や指導者にとって、発達障害の範疇でこども本人の特性に向き合う意味は、ありもしない「ふつう」という幻影の呪縛から開放され、関わり方を一から問い直すという発想の転換を可能にすることです。

かつて我が学び舎で教わった如く、育児書や母子手帳にある発達里程標は多様な発達の平均値に過ぎず、体重増加曲線も、「発語」や「両足ジャンプ」の獲得時期も、すべてその通りに育つこどもは1人もいません。しかしこの少子化の時代における核家族の子育ては、不安解消のためにはまずネット検索です。先日みかけたのですが、泣き続ける赤ちゃんを抱っこしたパパが、あやし方をスマホで調べ次々と試していく、TwitterのCMがありました。泣きやませる方法くらいなら構いませんが、ネット情報に提示される「ふつう」の発達と毎日にらめっこした挙句、些細なこと（たとえば、授乳の際にこどもと目が合わないなど）から我が子の発達に親が不安を訴える時期は、どんどん低年齢化している印象です。気にすればするほど、「ふつう」との乖離は大きく見えるものです。

「特性に合った支援」と口で言うのは簡単ですが、血を分けた我が子や、隣のクラスと比較されがちな自分の受け持ちを目の前にすると、案外難しいものではないでしょうか。自らの規準で物事を定めているテリトリーにおいて、規準に合わない行動は許しがたい。アンガーマネジメント研修などを聞いてみると、怒りを覚えるのは、自分の大事にしているこだわりの、他者の行為が抵触することがそもそもの発端だそうです。だから、よそで赤の他人がしていることなら流せることでも、家の中では片づけられない家人のだらしなさが許せなかったり、自分の話にいちいち茶々を入れてくる受け持ちの生徒に

苛立ったりする訳です。

我が家の息子は4月から某国立大学の修士課程の2年生になりますが、小さい頃から片付けが本当に苦手です。頼んだことや注意したことも、すぐに忘れてしまいます。部屋の中や机の上は常に混沌としており、出しっぱなしの物をたどれば、どのような行動をしたのか手に取るようにバレる奴です。

床に、プリントをばらまいてもよい四角いゾーンを規定する養生テープを貼ったり、机の備え付け棚に科目名を貼って分類を促してみましたが、困り感のない本人の動機づけにはならず。畳んで渡した洗濯物の山は、さらに種類別の小山に積み直しておくものの、クローゼットに仕舞うまでの経過日数は母子の我慢比べ（いつも根負けする私）。それでも今は、互いの距離感をわきまえ、折り合いのつくラインで生活しています。彼の洗濯物は自室から共有スペースへと雪崩れてくることはありませんし、私が用事を頼みたい時は、ちょうどその場所を通りかかったタイミングを逃さなければよい。つまり、電気を消してほしかったら、スイッチの前を通り過ぎる時に声をかけるべきで、一度にいくつも頼んでイライラをためることは不要なのです。「昨夜、玄関の電気がつけっ放しだったよ」と言ったら、「ガスの火は消せたのに、惜しかったね」と自分で申します。クシャクシャの笑顔でグッジョブポーズをされると、それ以上強く言う気も失せようというものです。

地域においても、（多少、暗黙の了解が苦手な人々にとって）暮らしやすい環境を維持していくことが求められます。たとえば、交通標識や駅の表示、電車の中の工夫などを見てみましょう。誰もが知っている公共の場でのルールをできるだけわかりやすく示し、それを守るよう促しています。次の電車を待つのに「3列にお並びください」と繰り返しアナウンスされることよりホーム上の黄色の3列ラインの方が、雄弁に並ぶ行動を促進します。電車の7人掛けの座席も、7人分の凹みがシートに設定されていれば、だれもが自ずとその通りに座るでしょう。言葉が伝わらないから視覚的に示すのではなく、ガミガミ言われることなくその気になる仕組みと考えれば、「構造化」とは発達障害への支援に限定されたことではないのです。こうあるべき、こうするべきと自分本位で思い込まず、相手の特性や自分のこだわり気づいて折り合うポイントを、それぞれが探してみたらいかがでしょう。

発達障害支援の裾野の広がり、今や専門病院への受診率、診断率の増大を招いています。しかし、個性と障害のグレーゾーンにいる子どもたちが暮らしやすくなるための支援のノウハウが、子育ての現場をはじめとして世間にごく自然に浸透していくことが、これからの目指すべき方向なのではないか、と考えるのです。